

# 令和4年度 スポーツ指導者海外研修事業 帰国者報告書

# 2022





# スポーツ指導者海外研修事業 令和4年度帰国者報告書目次

## 令和元年度長期派遣（2年）

松岡 佑起（陸上競技） .....	3
-------------------	---

## 令和3年度短期派遣（1年）

片桐 央視（サッカー） .....	19
-------------------	----

○令和元年度 長期派遣（2年）1名

競技団体		(フリガナ) 氏 名	研修項目	研修先	研修時期
1	陸上競技	マツオカ 松岡 ユウキ 佑起	陸上競技中長距離種目におけるケニア人とイギリス 人選手の強化育成について	イギリス (ロンドン)  オランダ (ナイメーヘン)  イギリス (カーディフ)	令和2年3月17日～ 令和3年1月22日 (研修中断期間:令和3 年1月23日～令和4年 3月31日)  令和4年4月1日～ 令和4年7月31日 令和5年1月10日～ 令和5年3月31日  令和4年8月15日～ 令和4年12月29日

※令和2年3月 イギリス / ロンドンへ渡航後、新型コロナウイルス感染症の影響等により一時帰国。

※令和4年4月 新型コロナウイルス感染症の影響や近年のイギリスにおける移民問題の観点からビザの審査が厳しく、ビザ取得が見込めない状況となり、イギリスでの研修が困難となったため、研修地をオランダ / ナイメーヘンへ変更。

※令和4年8月 豊富な指導経験と指導実績をもつ James Thie コーチのもとで、イギリスにおけるトップレベルのコーチング及びトレーニング方法を学ぶため、研修先をイギリス / カーディフへ変更。

○令和3年度 短期派遣（1年）1名

競技団体		(フリガナ) 氏 名	研修項目	研修先	研修時期
1	サッカー	カタギリ 片桐 ヒロミ 央視	ヨーロッパのクラブのトップチームやヨーロッパの 連盟などで、現在行われている分析システム、分析 方法、選手へのコーチング、データの取得、使用方法、 共有、育成や指導者への関わりや、有効な使用方法 などを学ぶ事を研修題目とする。	ドイツ (ミュンヘン)	令和3年9月19日～ 令和4年9月18日

## 研修員報告〈陸上競技 松岡 佑起〉



令和元年度・長期派遣（陸上競技）

### I. 研修題目

陸上競技中長距離種目におけるケニア人とイギリス人選手の強化育成について

### II. 研修期間

2020年3月17日～2023年3月31日

（研修中断期間あり 2021年1月23日～2022年3月31日）

### III. 研修地及び日程

#### （1）研修地

Global Sports Communication

Cardiff Metropolitan University

#### （2）受入先関係者

Jurrie van der Velden (Global Sports Communication Athletes and Event Manager)

John Litei (Global Sports Communication Long Distance Coach)

James Thie (Cardiff Metropolitan University Senior Lecturer)

#### （3）研修日程

##### ①通常研修

##### 1) Global Sports Communication

2022年4月1日～4月15日、7月1日～7月31日、2023年3月1日～3月31日

##### 2) Iten (Global Sports Communication ケニア人選手活動拠点)

2022年4月16日～2022年6月30日、2023年1月10日～2月28日

##### 3) Cardiff Metropolitan University

2022年8月15日～2022年12月29日

##### ②特別研修

期日	研修地	大会名及び研修内容
2022/4/10	Netherlands Rotterdam	Rotterdam Marathon 視察
2022/5/7	Kenya Nairobi	Kip Keino Classic 選手サポート
2022/5/8	Kenya Nairobi	Nairobi City Marathon 大会サポート

期日	研修地	大会名及び研修内容
2022/5/22	Kenya Iten	The Betika 15km Road Race 選手サポート
2022/6/24 ~ 25	Kenya Nairobi	Trials World Championship and Commonwealth Games 選手サポート
2022/8/2 ~ 7	England Birmingham	Commonwealth Games 視察
2022/9/18	Wales Swansea	Admiral Swansea Bay 10k 視察
2022/9/24	Wales Pembrey	Welsh Road Relay Championship 視察
2022/10/2	Wales Cardiff	Cardiff Half Marathon 選手サポート
2022/10/15	Wales Cardiff	Cardiff Cross Challenge 選手サポート
2022/11/26	England Liverpool	British Athletics Cross Challenge Liverpool 選手サポート
2022/12/11	Italy Torino	European Cross Championship 視察
2022/12/31	Spain Barcelona	Cursa dels Nassos 視察
2023/1/21	Kenya Nairobi	National Cross Country Championship 視察
2023/1/29	Kenya Eldoret	Discovery Kenya 選手サポート
2023/2/4	Kenya Eldoret	Sirikwa Classic 選手サポート
2023/2/24 ~ 25	Kenya Nairobi	2nd AK Track & Field Weekend Meet 選手サポート

#### Ⅳ. 研修概要

##### (1) 研修題目の細目

- ①Global Sports Communicationとケニア人選手育成について
- ②ケニア人選手活動拠点
- ③Cardiff Metropolitan Universityでの研修

##### (2) 研修方法

- ・Global Sports Communicationオフィスまたはオンラインミーティングでマネジメント、選手育成方針、ケニア人選手活動拠点、サポート体制について学ぶ。
- ・Global Sports Communicationがサポートするケニア人選手の活動拠点であるIten（ケニア）でJohn Liteiコーチのアシスタントとして練習や試合に帯同し、ケニアのトレーニング環境やコーチングについて学ぶ。

- James Thieコーチのアシスタントとして練習や試合に帯同し、同コーチのコーチングについて学ぶ。

## V. 研修報告

### はじめに

2020年3月、イギリスにおける陸上競技のコーチングまたは強化体制を学ぶためロンドンに渡航。しかし、到着して間もなくコロナウィルスの流行によってイングランドはロックダウンに入った。パンデミックによって世界中が混乱し、イギリス国内でも厳しい規制が敷かれ、外出等の行動が制限される状況下では、チームでの練習すら行えず、オンラインでコーチと連絡を取り合い、状況の確認をすることしかできなかった。ロンドン滞在中、断続的にロックダウンが行われ、私は十分な研修活動が行えないままビザの期限が迫り、ビザを再取得するため一度帰国した。

帰国後、再渡航に向けてビザ取得の準備を進める中で研修先の大学にビザのサポートを依頼。しかし、未だ猛威を振るうコロナウィルスの影響や近年のイギリスにおける移民問題の観点からビザの審査が厳しく、大学側としてビザのサポートが困難であるとの連絡を受けた。別の渡航方法を模索したが同大学での研修が困難であると判断し、研修地の変更も視野に入れて新たに研修の受け入れ先を探した。その後、海外のランニングクラブやエージェントとのパイプを持つ日本人エージェントから男子マラソン世界記録保持者Eliud Kipchoge選手をはじめ世界トップレベルの選手が所属しているGlobal Sports Communicationを紹介していただくことができ、同社からのサポートを受けてケニアでの研修と東京オリンピック・イギリス代表コーチであったJames Thieコーチの下で研修を行えるようになった。このことによって、当初の研修目的であったイギリスでの研修とGlobal Sports Communicationがマネジメントするケニア人選手の活動拠点（Iten）での研修が可能となり、それぞれの国の競技環境、文化、選手の背景を知ることによって有意義な研修にできる旨をJOCに伝え研修地の変更に至った。

本報告書では2度目に渡航して研修を行った内容について記述することとする。

### （1）Global Sports Communicationとケニア人選手の強化育成

ケニアでの研修は、ケニア人選手のマネジメントを行っているGlobal Sports Communication（以下GSC）の協力の元、GSCが運営するトレーニンググループに帯同し、彼らがどのような環境で競技に取り組んでいて、強化育成の体制がどのようなものなのか、コーチはどのようにして選手の能力を引き出しているのか、中・長距離種目において数々の実績を残しているケニアのアプローチ方法について研修を行った。

ケニア人は高地民族であるため中・長距離種目において優れた能力があるとされており、世界が注目する選手が多数存在している。ケニアには、日本のように企業に所属して活動する実業団のシステムがないため、日本とは活動の形態は異なるが、マネジメント会社またはスポンサーからのサポートを受けて活動し、競技に集中できる環境がある。また、ケニアの陸上競技の歴史において、現在に至るまで選手達の目標と

なる選手が多く存在しており、選手のマインドセットにも大きく影響し、競技に対して高いモチベーションがある。

その彼らがキャリアを積んでいくために欠かせない存在としてエージェントがいる。世界で活躍している選手とエージェントは密接に関係しており、実績を残す選手の多くは、優秀なエージェントがキャリアをサポートしていることが多い。このエージェントと選手の関係性は非常に興味深く、私が研修を行ったトレーニンググループでは、コーチとエージェント（マネジメント会社）が連携して選手の強化育成システムを構築していた。本研修において、GSC組織についての理解をなくして、ケニア人選手の競技環境を語ることはできない。



Global Sports Communication Office

#### ①Global Sports Communication

Global Sports Communicationは1970年代にオランダを代表する長距離選手であったJos Hermens氏によって1985年創設されたスポーツマネジメント会社である。設立から現在に至るまで多くの選手をマネジメントし、国際大会においても多くの実績を残し、陸上界を牽引し続けている。GSCは選手のマネジメントの他に国際的なランニングイベントの企画運営、選手のブランディングやスポンサーシップの提案等のマーケティングを主な業務とし、陸上界だけでなくスポーツの発展に大きく貢献している。彼らの代表的なプロジェクトで2019年Eliud Kipchoge選手がマラソンで非公式ながら1:59:40を記録し、史上初2時間の壁を突破したINEOS 1:59 Challengeは記憶に新しい。GSCはマネジメント会社でありながらランニングチームを所有し選手の育成も積極的に行なっており、同社がプロランニングチームとして立ち上げたNN Running Teamは世界で最も有名なクラブの1つである。

GSCは選手との信頼関係を大切にし、時間をかけて育成することを方針としている。選手とビジョンを共有し、個々の競技力、学習能力、個性に合わせて中・長期的な計画を立てて強化育成を行っている。現在、男子5000m、10000m両種目の世界記録を持つJoshua Cheptegei選手もジュニア期からGSCのサポートを受けている選手の1人で、時間をかけて着実にステップアップしてきた結果、2020年に2種目で世界記録を樹立、東京オリンピック5000mで金メダル獲得するなど、世界で注目される長距離選手に成長した。これは選手の力に合った現実的な目標設定を行い、成功体験を自信につなげるように育成してきたGSCの育成の形と言える。これほど時間をかけて選手の育成を行なっているマネジメント会社は世界でも珍しい。

#### ②Jos Hermens氏

Global Sports Communication CEOのJos Hermens氏は、国際陸連公認のエージェ

ントの資格（AR）を持ち、これまでジュニア選手からトップ選手まで数多くの選手のマネジメントに関わってきている。代表的な選手では、元エチオピア代表のHaile Gebrselassie 選手。5000m、10000m、ハーフマラソン、マラソンの元世界記録保持者で、オリンピックと世界選手権では10000mで連覇を果たしている。

Hermens氏はマネジメントを行う際、選手1人1人と向き合い、時間をかけて育てることを方針としている。特に若い世代の選手に対しては、教育的な視点で話をしたり、将来設計に関してアドバイスしたりして個々の自立を促していく。GSC全体にはHermens氏のこういった考え方が浸透しており、それぞれ背景の違う選手を理解し、信頼関係を築き、GSCの理念を共有した中で共に目標の達成に向けてチャレンジしている。



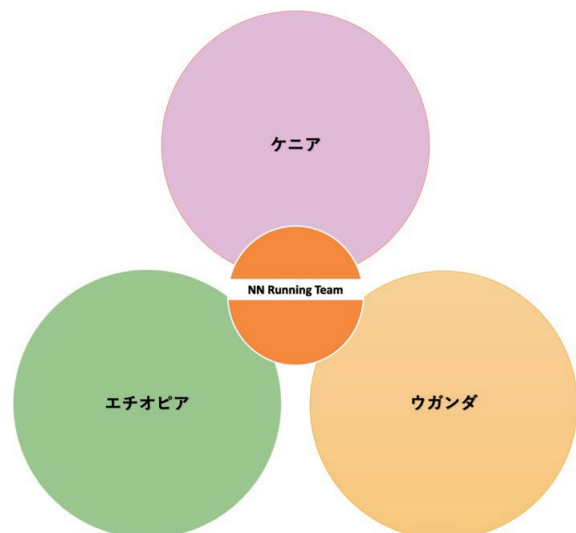
NN Running Teamイベントにて  
Jos Hermens氏と

### ③エージェント

エージェントは、選手の代理人として主に大会側やスポンサーとの交渉を役割とし、World Athletics（以下WA）では各競技種目において世界リスト上位30名（2023年3月時点）の選手にはWA公認のエージェントをつけることを定めている。マラソンやハーフマラソン等のロードレースにおいてもWA公認ラベル大会ではエージェントを通してエントリーやその他の交渉をすることがルールになっていることから基本的にはどの海外レースに出場する場合でもエージェントが必要と考えた方が良い。選手にとってエージェントと契約することは、キャリアを積んでいくための第一歩であり、出場枠が限られているレースにエントリーできるかどうかエージェントの交渉力によって左右するケースもあるので、選手にとって力のあるエージェントと契約することは、チャンスを得られる機会が増えると考えられている一面がある。

### ④NN Running Team

NN Running Teamは、GSCがマネジメントする選手の中から選抜された約20名のチームである。現在、男子マラソン世界記録保持者でオリンピックにおいて2度金メダルを獲得したEliud Kipchoge選手をはじめ、オリンピックまたは世界選手権のメダリスト、世界記録保持者などトップランナーが在籍している。メンバーの国籍は、オランダ、ケニア、エチオピア、ウガンダ、イギリス、イスラエルと多国籍で、アフリカ人選手がチーム



の半数以上を占めている。

NN Running Teamの特徴はブランディング方法にある。プロ選手が活動する際は個人でブランディングすることが一般的だが、NN Running Teamの場合はチームとして発信していくことによって、チームのブランディングを高め、年月が経って選手が入れ替わっていても「世界トップ選手のプロチーム」というブランドを残し続ける仕組みを作っている。チームの情報の扱いについては、細心の注意が払われている。

#### ⑤GSCトレーニンググループの体制

GSCとマネジメント契約しているのは、アフリカ人長距離選手の人数が圧倒的に多く、ケニア・エチオピア・ウガンダにトレーニングキャンプを作り、拠点毎にコーチを置いている。エージェントとコーチは、定期的にミーティングを行い、選手の状態、次の試合予定などを確認し、状況によって都度計画を修正していく。目標達成に向けて、常に共通認識を持って取り組めるよう密に連絡を取り合う。

ケニアの活動拠点はKaptagatとItenにあり、KaptagatはItenに比べてトレーニンググループの規模が大きく、Eliud Kipchoge選手をはじめ、マラソン選手とトラック選手が多く在籍している。一方、Itenは少人数のグループでトラック種目を中心に組み込む選手が在籍。KaptagatとItenのグループ間で選手の行き来はほとんどなく、それぞれ専属のコーチの下で活動している。ItenのグループはJohn Liteiコーチが現場を任されており、Liteiコーチの下では男女合わせて15名程度の選手が練習を行っている。その中には、マネジメント契約していない若い選手も含まれている。

本研修において、GSCについて理解することは、スポーツマネジメントの観点から選手を取り巻く環境や育成について理解を深める側面を持ち、ケニア活動拠点においてエージェント、コーチ、選手の関係性の理解にもつながり、強化体制の実態を掴むためにも必須であった。

日本の実業団チームにおいては、所属チームが選手のマネジメントを行うことが一般的で、企業の方針が選手の育成に一定の影響を持つのに対して、マネジメント会社に選手が所属する形で選手中心に育成するGSCとではサポートの仕方が異なり、日本の仕組みと他国の競技環境について見識を広める良い機会となった。

日本でも一部ではエージェントとチームが連携して海外合宿やプロチームの練習に参加するなど、海外を意識した選手強化に取り組んでいるチームもある。今後、こういった形でエージェントとの連携によって選手の育成や強化を考えていくようなケースが増えていくのではないかと考える。

## (2) 活動拠点 Iten (ケニア)

### ①Iten High Altitude Training Center

Itenはケニア西部に位置する小さな町で、町の中心は標高2300m、近隣にはロードコース、クロスカントリーコース、トラック（オールウェザー、土）、トレーニングセンター等、練習環境が整っており治安も良いので生活しやすく、ケニアで最も有名なトレーニング地として知られている。Itenから偉大な選手が多く生まれているこ

とからランナーの聖地「Home of Champions」と呼ばれている町としても有名。Itenを活動拠点としている選手は様々で、マネジメント会社と契約してスポーツメーカーやスポンサーからのサポートを受けて活動している選手から、個人で練習を積む選手まで幅広くいる。ケニア国内でも有数のトレーニング地ということもあり、多くの選手が活動拠点にしているほか、海外からも年間を通して多くの選手がやってくる。

合宿を行う際は、High Altitude Training Center（以下HATC）もしくはKerio Viewが宿舎として選ばれることが多く、HATCはオールウェザートラック（HATC宿泊者は利用料無料）、ジム、サウナ、25mプールを完備しており、食事は1日3食と午前と午後に軽食を提供しているほか、週に3回トレーナーが行うスタビリティトレーニングに自由に参加することができ、充実した環境で合宿を行うことができる。HATCに宿泊しているのは、主に海外から来た選手で（市民ランナーも多数）、ケニア人選手はクラブチームが管理する家で共同生活、もしくは個人で家を所有していたり部屋を借りるなどしているのでHATCに宿泊しているケースは少ない。

今回、私はHATCに滞在し、施設や周辺の環境の視察、宿舎スタッフや宿泊者との交流によって多くの情報を得ることができた。海外から合宿に来た選手にとって、現地の人や他国の選手と交流できるチャンスがあることもHATCの魅力の1つではない

令和元年度・長期派遣（陸上競技）



かと思う。しかし、中にはそういった交流を避けて集中したいと感じる選手もいるだろう。その場合でも、必要以上に周囲と関わらず自分のペースを守って過ごすこともできるので、それぞれの選手にとってHATCは過ごしやすい環境ではないかと感じた。一方で、HATCでの滞在で懸念する点があるとする、停電がしばしば起こること、ソーラーを利用して湯を沸かしているため天候の悪い日が続くとシャワーの湯が出ないこと、食事が合わず物足りなく感じるかもしれないといったことが考えられる。ケニアは、日本と環境が大きく異なるので食文化や環境に不安を感じるという人もいるかもしれない。しかし、HATCで働くスタッフは、宿泊者が快適に過ごせるようにしっかりとサポートしてくれるので、特に不満なく過ごすことができるのではないかと考える。

また、ケニアに渡航する際は、事前にしっかりとした準備が必要で、幾つかのワクチン（黄熱、破傷風、腸チフス等）を接種し、体調の変化にすぐ対応できるように薬の用意は必須である。

## ②トレーニンググループとJohn Liteiコーチ

GSCが契約するコーチの条件として、コーチングスキルはもちろんのこと、コミュニケーション能力に優れ、GSCの育成方針に沿ったコーチングができる人材であることが求められる。Liteiコーチは、これらの条件を満たし、これまでの指導実績が評価されて選手育成を任されている。現役時には、世界的に有名なコーチRenato Canova氏の指導を受け、800mの選手としてCommonwealth Games\* 3位をはじめ、ヨーロッパのグランプリレースで活躍。引退後はCanova氏の下でアシスタントコーチとして選手の育成に携わった経験を持つ。2022年夏に行われたWorld junior Championshipでは、男子3000m、女子1500m、3000mにおいてメダルを獲得しており、トラック選手の強化育成において高い評価を受けている。



左からSamuel選手、Liteiコーチ、Canovaコーチ、私

Liteiコーチの練習メニューは、高負荷でしっかりとリカバリーを取って量をこなすのが特徴で、週に2～3回ワークアウトを行う。練習の設定タイムは、トップの選手を基準とした1つのみ。専門種目ごとにグループを分けることはあっても、走力でグループを分けることはしない。そのため、力のない選手は全てを消化することが難しく、途中で離脱することも珍しくない。毎回練習の負荷が大きいので怪我のリスクを懸念するところだが、意外にも怪我や足の不調を訴える選手は少なかった。普段から起伏を走り鍛えられていることや硬い路面でのランニングをあまり行わない分、ダメージが蓄積されにくいサイクルがあると考えられる。走行距離を意識した練習形態

\*Commonwealth Games

イギリス連邦に属する国や地域が参加して4年ごとに開催される総合競技大会

ではないので、距離を走って足を作る日本のアプローチとは異なり、状態が良くない時に無理に走ることはなく、足のダメージが蓄積しにくい。また、ケニアでは10月から2月までがクロスカントリーシーズンとなっており、マラソンランナー以外のほとんど選手はクロスカントリーに取り組むため、クロスカントリーで体を作りながらトラックシーズンを見据えて準備していることもシーズン中の強い負荷の練習に耐えられることに繋がっていると推察できる。加えて、1年中温暖な気候のため、気温が低いことで起こるアクシデントも少なく、コンディションを安定させやすいことも要因として挙げられる。



### ③クロスカントリーシーズン（ビルドアップ期）

ケニアも日本と同様にシーズンの期分けによって練習の内容は変わる。10月～2月は、クロスカントリーまたはロードレースシーズンでビルドアップ期と位置付けされる。トラック種目がメインの選手は、ビルドアップ期に日本のような走り込みと言われる走行距離を意識した練習は比較的少なく、距離走に代わってファルトレクが多用されている。ファルトレクは起伏のあるコースで行われ、メニューによってかかる負荷が変わる。

クロスカントリーシーズン中のワークアウトは週2～3回で、ロードでのファルトレクまたは変化走、クロスカントリーでのビルドアップ走、ヒルトレーニング、土トラックでのインターバルがベースとなる。

ワークアウト以外の日にコーチと顔を合わせることはなく、各々が練習スケジュールに沿ってjogを行う。ほとんどの場合、メニューにEasyもしくはModerateと記載され、走る時間と距離が決められている。

3月からは、本格的なトラックシーズンに入るため2月下旬からオールウェザートラックでのスピード練習を開始していく。

#### <練習内容例>

2'(1')×10+1'(1')×10 走行距離約15km

3'(1')×2+2'(1')×2+1'(1')×15+30"(30")×15 走行距離約18～19km

Hill Training 200m×10または300m×10

Cross Country 50' Build up (3'50"-3'00"/km)

\* ( )内はRecovery

### ④クロスカントリーレース

クロスカントリーレースのコースは会場によって特徴が異なり、比較的フラットで



ロードで変化走



Hill Training

ターンの多いコース、アップダウンの多いコース、全長15メートルほどの水濠のセクション、障害物を置くコースなど様々であった。距離はシニア男女共に10kが一般的で、他国と違って年中温暖な気候のため、冬のクロスカントリーのイメージからはかけ離れており、レースコンディションは過酷である。気温、風、コースのタフさを考えるとグラウンドコンディションが整っているとは言い難い中でレースが行われることがほとんどであった。しかし、クロスカントリーは、コースの攻略、ペース変化への対応（力の出し入れ）、状況判断、駆け引きなど、勝利するためには多くの要素が絡んでいる競技なので、グラウンドコンディションが過酷でも関係のない競技と言える。クロスカントリーの強豪国であるケニアでは、国内の激しい競争に勝ちWorld Cross Championshipの代表を掴み取らなくてはならず、このような環境下でのレースが選手の経験値を高め、成長させる機会になっていると考えられる。



クロスカントリーレースの様子

#### ⑤トラックシーズン

トラックシーズンは3月～8月。2月中旬から国内シリーズのAK Track & Field Weekend Meetが始まり、2月中旬～下旬はクロスカントリーシーズンからトラックシーズンの移行期間となる。本格的なトラックシーズンとなるのは3月からで、5月にはKip Keino Classic (WA Continental Tour Gold)、6月にはオリンピック・世界陸上の国内選考レースと続く。トップ選手は、シーズンを通してDiamond Leagueや

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
クロスカントリー									クロスカントリー		
		トラック									

### ケニア年間スケジュール

欧州のレースを中心に転戦する。一方、海外レースのチャンスがない選手は、ケニア国内のレースの数が多いため、シーズン中に走るレースの本数は限られてしまう。

エージェントと契約している選手とそうでない選手とでは、年間計画、アプローチ方法、チャンスの数など、シーズンの過ごし方が大きく異なることもケニアの特徴と言える。

#### ⑥ケニアの強さの要因

ケニアでは、科学的なトレーニングを積極的に取り入れている様子はなく、その状況を見ると、強さの要因は生活環境が高地であることと豊富なトレーニング環境にあると言える。クロスカントリー、ロードコース、トラックが揃う環境は、あらゆる練習の実施を可能とし、それが高地であるという点で大きなアドバンテージがある。さらにRenato Canova氏をはじめ、外国人コーチがケニア人選手の育成を行うようになったことでケニアの中・長距離種目のアプローチ方法に影響を与え、競技レベルを高めるきっかけを作ったことも大きい。そして、国際大会においてケニア人選手が次々と成果を挙げていくことで、他の選手のマインドセットに大きな影響を与えプラスの効果を生んでいると考えられる。

昨今はワールドマラソンメジャーズが代表されるように、世界的にロードレースの市場が大きくなり、若い選手が早い段階でマラソンに挑戦する傾向にある。以前は、トラックでキャリアを積んで選手として成熟したのちにマラソンに転向する流れがあったが、この数年で世界の流れが変化し、ケニア国内においては、トラックレースが減少、マラソンランナーの増加に拍車がかかる状態となっている。

マラソンの高速化の要因としては、ケニア人選手をはじめとする、エチオピアなどのアフリカ人選手が早い段階でマラソンに進出していることが考えられる。また世界で最も有名なマラソンランナー Eliud Kipchoge選手の存在とマラソンで得られる高額賞金も選手の大きなモチベーションとなっている。

### (3)Cardiff Metropolitan University

Cardiff Metropolitan Universityは、Walesの首都Cardiffにある総合大学で、スポーツ、健康科学、ビジネス、芸術、教育といった分野に強みを持っている。中でもスポーツの分野では優秀な選手を多く輩出している名門大学であり、陸上競技においてはオリンピック選手やウェールズ代表選手などを多く輩出している。大学には、アウトドトラック、インドアトラック、ジムなど充実した施設が揃い、スポーツ科学の研究

4月20日	水	10×200m (27"/rec-1')-rest 6' 10×200m (25"/rec-3')
4月21日	木	jog
4月22日	金	Hill Training 10×200m (30"/rec-3'00-3'30)
4月23日	土	jog
4月24日	日	4×3000m (8'45"/rec3')
4月25日	月	jog
4月26日	火	jog
4月27日	水	7×600m 1 - 1'36" (rec-1') 2 - 1'33" (rec-2') 3 - 1'30" (rec-3') 4 - 1'28" (rec-4') 5 - 1'26" (rec-5') 6 - 1'24" (rec-6') 7 - Max speed
4月28日	木	jog
4月29日	金	30k
4月30日	土	1200m (3'03") + 300m 1000m (2'30") + 300m 800m (1'56") + 300m 600m (1'24") + 300m *300m(42"-41")
5月1日	日	jog
5月2日	月	40' easy+6k (2'55"/km)
5月3日	火	5×400m (55"-rec 3')-rest 6' 5×300m (40"-rec 2')-rest 6' 5×200m (25"-rec 2')
5月4日	水	jog
5月5日	木	jog
5月6日	金	jog
5月7日	土	Kip Keino Classic

#### 試合までの練習メニュー例

等も行われており、選手にとって非常に恵まれた環境である。

#### ①James Thieコーチ

2011年に同大学のコーチとして指導をスタートし、現在に至るまで中・長距離種目において男女問わず複数の代表選手を育成している。その指導力は高く評価されており、ウェールズ陸連やイギリス陸連の代表コーチとしても活動している。

Thieコーチは元1500mの選手で、イギリス代表としてEuropean Championship、Commonwealth Games両大会においてファイナリストの実績がある。

#### ②クロスカントリーシーズン

大学は9月に新学期を迎え、10月からクロスカントリーシーズンがスタートする。毎年11月に開催されるEuropean Cross Country Championshipを視野に入れながら練習を積み、3月まではイギリス国内またはヨーロッパ各地で行われるレースに参加していくのが基本的な流れである。体作りを主の目的としながらレースに出場して基礎体力の向上を図る。練習の内容はファルトレクやヒルトレーニングといったランニングエコノミーを高めることを目的としたものが多い。9月はオフシーズンで練習強度が低く、10月から土台を作る練習が始まり、徐々に強度を高めていくので、まだ走力がない新入生でも上級生と一緒に練習を消化することが可能。この期間はトラックでのスピード練習はほとんど行われない。

#### ③インドアトラックシーズン

1月になるとインドアトラックレースのシーズンが開幕する。1月～3月はクロスカントリーのシーズンと重なるようにして各地でレースが行われる。クロスカントリーとインドアトラックの両レースに出場する選手もいれば、どちらか一方だけの選手もいる。10月から3月をどのように過ごすかは選手の目標やタイプによって異なる。

インドアトラックは、天候に左右されることなく、安定したコンディションで競技ができるメリットがあり、3月からのアウトドアトラックシーズンに向けて状態を整えていきやすい。

#### ④アウトドアトラックシーズン

3月～8月はアウトドアトラックシーズンとなる。イギリスでは、クロスカントリーからインドアトラックシーズンに移行し、アウトドアトラックシーズンに向けて段階的にギアを上げて準備を整えていくので、3月には体が仕上がった状態でアウトドアトラックシーズンを迎えるサイクルができている。そのため、初戦または2戦目から好記録で走れる

ケースが多い。イギリスは、インドアトラックレースが盛んでUK Indoor ChampionshipやUK University In-

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
クロスカントリー									クロスカントリー		
インドアトラック		アウトドアトラック									

イギリス年間スケジュール

door Championshipに向けて、高いモチベーションで取り組んでいることが、その後のアウトドアトラックシーズンをいい状態で迎えられるきっかけになっていると考えることができる。

#### ⑤トレーニング

トレーニングはCardiff Metropolitan Universityと近隣にあるCardiff Universityの生徒と一緒にいる。James ThieコーチとSteve Mitchellアシスタントコーチ2つのグループに分かれており、選手は自分に合うコーチのグループを選択できる。基本的には走力のあるCardiff Metropolitan Universityの選手はThieコーチのグループ、ビギナーや競技志向がそれほど高くない選手はアシスタントコーチのグループに分かれていた。

強度の高い練習を行うのは、火曜日・木曜日・土曜日。土曜日の練習は、午前に行う場合と、毎週土曜日の朝にHeath Parkで行われるPark Run 5kに参加して練習とする場合があった。

私は、オフシーズン後の立ち上げ時期からクロスカントリーシーズンまでをThieコーチの下でコーチングについて学ぶことができた中で、Thieコーチの練習について印象的だったことは、ファルトレクとヒルトレーニングを多用しビルドアップ（体作り）を徹底すること。火曜日の練習はHeath Park内の1周約900mある広場でファルトレクを行うことが多く、木曜日はヒルトレーニングとテンポ走またはトラック（5レーン）で変化走、土曜日は再びファルトレクを行うという流れであった。ファルトレクは、時間やペースに変化をつけて選手が飽きないように毎回内容を変え、周回コースで行う際には順走と逆走を繰り返すことで先頭を走る選手と最後尾を走る選手の差が開き過ぎず、それでいて全員に追う側と逃げる側を意識させながら、集中して練習に取り組めるように工夫がされていた。練習前に具体的な指示は少なく、体の使い方や出力をコントロールして良いリズムで走るようにと伝えられる程度で、選手はそれぞれ自分の走りを意識しながら追い込んでいた。ビルドアップ期間は、ファルトレクでレースペースの速さで走ることはあっても、トラックでのスピード練習はほとんど行われなかった。

12月に入ると、インドアトラックでスピード練習を開始する。初めは設定タイムに幅を持たせて、それぞれのコンディションに合わせて実施し、その後徐々に強度を高めていく。9月からファルトレク中心の練習を消化してきた選手達は、スピード練習に対するモチベーションが非常に高かった。また、スピード練習を一定期間実施していなかったにも関わらず、選手達のスピードレベルが上がっており、ビルドアップ期前には消化できなかった高い質の練習がこなせるようになっていた。これはファルトレクによって心肺機能とランニングエコノミーが向上したことによって走力が上がったと推察できる。

#### ⑥特徴と強さの要因

イギリスの特徴として、競技環境を自らが選べる自由度の高さがある。例えば、師事するコーチがいたとしても他のコーチのところで一時的に練習を行ったり、他の

<例>

◆ファルトレク  $5'(4') + 4'(3') + 3'(2') + 2'(1') + 1'(3') + 3'(2') + 2'(1') + 1'$   
 $4 \times 6'(1') + 3'(2')$

$3'(1') \times 10$  奇数本と偶数本でペースを変える

◆Hill Training  $2 \times 25'' + 2 \times 20'' + 2 \times 15'' + 2 \times 10''$   
 $8 \sim 10 \times 70'' (1'50'')$   
 $8 \times \text{Hill} 30 (2'30'') + 8 \times \text{テンポ走} (2'30'') + 8 \times \text{Hill} 30 (2'30'')$

◆トラック (5レーン)  $6'(2') + 3 \times 2'(2') + 6 \times 1'(1')$   
 $10 \times 3'(75'')$  奇数本と偶数本でペースを変える  
 $10'(3') + 10 \times 1'(1')$

\* ( ) 内はRecovery

トレーニンググループの練習に参加したり、選手だけで海外合宿を行うなど、所属しているグループに縛られずにコーチや練習環境を選択できる自由度が高いように感じた。またコーチ側にも理解があり選手の意思を尊重している。このことによって、選手は自らの選択によって、経験値を高める機会を増やせることに繋がる。これは選手が自立していることが前提となるが、その背景には個を尊重する国民性で、移民が多く、ルーツが異なる人々をお互いに認め合う社会があるからと言えるだろう。イギリスにルーツが異なる人が多いという点に関連して、過去にイギリス代表としてオリンピックに出場した選手は、イギリスの競技レベルの高さの要因として混血を挙げている。西アフリカにルーツを持つ選手は短距離選手として、東アフリカにルーツを持つ選手は中・長距離選手として能力を開花させているケースを例に挙げている。こうしたケースは、いろいろな国にルーツを持つ人がいるイギリスならではのと言えるのかもしれない。さらに昨今では、白人選手の活躍も大きな注目を集めている。Thieコーチは、「イギリス陸連として、選手に対して積極的な強化策を取っているわけではなく、アプローチ方法はそれぞれのトレーニンググループで異なる」と話していた。組織的な取り組みがあまりない中で選手の成長を促す要因は何かと考えると、やはりイギリスにおいては、クロスカントリーによる強化が大きく影響しているのではないかと考える。イギリスはPark Run発祥の国で、毎週土曜日に国内各地の公園でPark Runが行われる。大人から子供まで誰でも自由で参加することができ、多くの人がクロスカントリーレースに親しみ、走る機会も多い。そのような環境で育ち、日々のトレーニングでもクロスカントリーを取り入れることが多いことからトラック種



Heath Parkでのファルトレク

目での活躍とクロスカントリーの結びつきは強いと考えられる。これはケニアの環境とも通じるものがあり、クロスカントリーによって土台が作られた上に充実した実戦的なトレーニングを上乗せすることで選手の強化に繋がっていると言える。

#### ⑦Thieコーチのコーチング実践例

##### ➤見極め

競技レベルが異なる選手達が集まってくるので、まずは選手の肉体、精神、年齢、身体能力、競技歴を理解し、ヒルトレーニングやサーキットなどを試して個々の能力を見極めることから始める。オーバートレーニングに注意し、練習をやらせすぎないように気をつけている。将来を考えたプログラムで長く健康で競技を楽しめる環境を作るよう心掛けている。

##### ➤モチベーションのコントロール

ビルドアップ期にトラックでのスピード練習を行わないことで、トラックでの練習を再開した時、選手のモチベーションを高める狙い。そこにビルドアップ期で作った体もプラスされて、これまで出せなかったスピードが出せるようになる。もしも1年中トラックで練習していたら、こうした変化は生まれえない。同じ環境の中でも選手たちには新鮮さを与える必要があり、選手のモチベーションをコントロールする工夫をしている。

##### ➤1対1のコミュニケーションを大切にする

Thieコーチは、選手に対して全体のミーティングを行わず、練習に集まってきた時、練習中、練習後に選手達に声をかけてコミュニケーションを図る。普段の会話を大切にすることで選手が感じている課題やプライベートな悩みに対しても一緒に向き合う姿勢をとっている。心が揺れ動く繊細な若い年代だからこそ、個々を尊重し近い距離で寄り添うコーチングを行う。

##### ➤健全な精神と体

前提として「競技を楽しめる健全な精神と体があってこそ」という考え方がある。何気ないコーチの一言によって、選手の精神や体のバランスが崩れることがある。その代表的な例として、体型を注意された選手が拒食症になるケース、女子選手の場合は過度な練習やストレスが原因でホルモンバランスが乱れて生理不順になるケースがある。そのようなプレッシャーを選手に与えないよう注意を払い、特に女子選手に対しては、体調の変化に気を配り、生理の周期が正しく健康な状態であることを第一に考えている。

##### ➤データの活用

半年に1～2回、選手の乳酸測定を実施。そのデータを元に練習強度を測る。ただし、測定は任意でデータの活用に興味のある選手だけ実施し、強制はしない。データを活用する場合、選手がデータまたは数値に囚われすぎないようにフォローしている。

## Ⅵ. 研修を終えて

研修を通して海外の文化に触れ、さまざまな国籍、背景を持つ人達と出会い、彼らと時間を共有し良好な関係を築いていく中で、異文化への理解と相手を尊重し理解することの重要性を強く感じた。

研修を行なった各国のコーチングの現場では、選手とのコミュニケーションが最も重要視されていた。国、文化、競技環境は違っても、選手とコーチが良好な人間関係を築き、選手から信頼されることが最も大切であることは共通する。その上でLiteiコーチとThieコーチに共通していた点は、チーム全体でのミーティングを行わず、コーチの競技観を選手に押し付けることや細かい指示をしなかったことである。両コーチは、選手の自立を促しフォローするコーチングスタイルをとっていた。選手と強い信頼関係を築くことが容易ではないことを知っており、どんな練習よりもコミュニケーションを大切にしていた。

オランダ、イギリス、ケニアそれぞれの国で研修活動を行えたことで海外から日本がどう見られているのかを知ることができ、私の見識を広げる大きなきっかけになった。研修を通して得られた人との繋がりを今後も大切にして、彼らとの意見・情報交換を行いながら世界の動向に注視し、国内の競技関係者と共に陸上競技の発展に尽力していきたい。

コロナウィルスによって、世界の状況が大きく変化する中での研修活動は、困難なことに直面する場面も多かったが、私を成長させてくれたと感じている。

最後に、このような機会を与えてくださったJOCをはじめ、陸上競技連盟、関係各位に御礼申し上げます。

## 研修員報告〈サッカー 片桐 央視〉



令和3年度・短期派遣（サッカー）

### I. 研修題目

ヨーロッパのクラブのトップチームやヨーロッパの連盟などで、現在行われている分析システム、分析方法、選手へのコーチング、データの取得、使用方法、共有、育成や指導者への関わりや、有効な使用方法などを学ぶ事を研修題目とする

### II. 研修期間

2021年9月19日～2022年9月19日

### III. 研修地及び日程、受入関係者

#### (1) 主な研修先

- FC Bayern München

#### (2) 主な受け入れ関係者

- Johannes Behr (FC Bayern München Campus Chief Analyst)
- Martín Demichelis (FC Bayern München Second Team Head Coach)
- Danny Galm (FC Bayern München U19 Team Head Coach)
- Oskar Kretzinger (FC Bayern München Skills lab Chief Coach)
- Giacomo Stey (FC Bayern München First Team Analyst)
- Michael Senske (FC Bayern München Data Analyst)
- Florian Zahn (FC Bayern München Campus Chief Scout)

#### (3) 研修日程

通常研修

- ①FC Bayern München Campus Analyst Group (Match Analyst/Data Analyst/Skills lab)

期間：2021年9月22日～2022年1月31日

- ②FC Bayern München U19 Team

期間：2022年2月1日～2022年3月31日

- ③FC Bayern München Second Team & First Team Analyst Group

期間：2022年4月1日～2022年5月22日

- ④FC Bayern München World squad

期間：2022年7月5日～2022年7月17日

- ⑤FC Bayern München Second Team

期間：2022年8月3日～2022年9月3日

- ⑥FC Bayern München Campus Analyst Group

期間：2022年9月4日～2022年9月15日

記載のない期間は、女子のトップチーム、U17、U16、U15のトレーニング及び試合の視察

特別研修①：

Internationaler Trainer-kongress（ドイツ指導協会のコーチカンファレンス）

期間：2022年7月24日～2022年7月27日

特別研修②：

DFB-Akademie 視察（ドイツサッカー連盟の新しい施設）

期間：2022年8月1日

## Ⅳ. 研修概要

### （１）研修題目の細目

- ①FC Bayern Münchenについて（組織・施設）
- ②アナリストグループの分析方法と役割
- ③各チームにおけるトレーニングと選手育成マネジメント
- ④ゲーム環境とゲーム内容
- ⑤最先端テクノロジーを活用したトレーニングSkills lab
- ⑥ドイツのサッカー文化

### （２）研修方法

アナリストに所属し、現在FC Bayern Münchenが行なっている分析作業を手伝うと共に学び、その後は期間毎に決められたチームのトレーニング、スタッフミーティング、選手ミーティング、試合の全てに帯同し、分析から試合へのプランニング、トレーニングへの落とし込みなど、チームでの活動を共にする事で、実際に行われている事を学んでいく。

## Ⅴ. 研修報告

### 初めに

#### 【研修先の決定】

今回、スポーツ指導者海外研修員に選んで頂き、念願の海外研修の機会を与えて頂いて非常に嬉しかったが、研修先が決定する事は非常に難しかった。新型コロナウイルス感染症のパンデミック真っ只中であつたため、いつ行けるのか、本当に行けるのか不安があつた。その中で研修先をFC Bayern Münchenにし、受け入れて頂くことができた。FC Bayern Münchenと（公財）日本サッカー協会は2018年よりパートナーシップを結んでおり、お互いにこのパートナーシップをより活性化させたいという思いがあり、その思いに便乗するような形でお願いし、履歴書を送り受け入れて貰える事ができた。後にわかつた事だが、このような世界的なクラブには多くの研修受

け入れの希望が国内外からある。その中でも日本サッカー協会のチーフテクニカルコーチであり、オリンピックやワールドカップの担当経験があった事が、FC Bayern Münchenの方々にも興味を持ってもらえて、受け入れてもらえた。今までの経験がこの研修に繋がって本当に良かったと思う。受け入れを決定してくれたチーフアナリストには、日本という普段なかなか接点のない人が入る事によって、そこにいるメンバーに、普段とは違う考え方や視点を与えるきっかけになって嬉しいと感謝された。世界トップのクラブでありながら、非常にオープンな方達だったから実現した研修となった。

### （1）FC Bayern Münchenについて（組織・施設）

FC Bayern Münchenは名実共に世界トップのクラブの一つであり、サッカーに詳しくない人でも名前は聞いた事のあるくらい有名なクラブである。2019-20シーズンにUEFAチャンピオンズリーグで優勝し、翌年のFIFAクラブワールドカップでも優勝し、世界一にも輝いたクラブである。2022シーズンまでのUEFA Club Coefficientsでも2019年よりトップに君臨している。

※Club Coefficientsとは、UEFAチャンピオンズリーグ、UEFAヨーロッパリーグ、UEFAヨーロッパカンファレンス リーグの過去5シーズンに出場したクラブの結果に基づいたランキング（UEFA.comより）

現在トップチームの監督を務めるのはユリアン・ナーゲルスマン氏であるが、彼はブンデスリーガで史上最年少の28歳で Hoffenheim の監督に就任し、2021-22シーズンよりFC Bayern Münchenの監督に就任した。34歳にして、世界一のクラブを率いる

ことになったが、サッカーのスタイルや新しい戦術を生み出し、攻守にアグレッシブなサッカーを展開する監督であり、その戦術やマネジメントは日本のサッカー指導者の中でも最も興味を持たれている世界の指導者の一人であると言えるだろう。

また、FC Bayern Münchenは日本との縁も昔から深く、それを大切にしている。1960年に東京オリンピック（1964年開催）の強化に向けて日本代表コーチとして来日し、日本のサッカーの強化、指導者養成、ユース育成などの礎を築き、「日本サッカーの父」と称されているデットマール・クラマー氏は、1968年メキシコオリンピックで銅メダルを獲得したチームのアドバイザー的な役割を果たした後、FC Bayern Münchenの監督に1975年から就任。そこでヨーロッパチャンピオンズカップ（現UEFAチャンピオンズリーグ）2連覇を果たした。この記録は、未だFC Bayern Münchenの中でも破られていない。日本サッカーの発展に尽力された方が世界のトップのクラブでも活躍し、その繋がりが今のパートナーシップにも繋がっていると言え

Pos	Club	Country	17/18	18/19	19/20	20/21	21/22	Pts	NA
1	FC Bayern München	GER	29,000	20,000	36,000	27,000	26,000	138,000	15,042
2	Liverpool FC	ENG	30,000	29,000	18,000	24,000	33,000	134,000	21,328
3	Manchester City FC	ENG	22,000	25,000	25,000	35,000	27,000	134,000	21,328
4	Real Madrid CF	ESP	32,000	19,000	17,000	26,000	30,000	124,000	19,228
5	Chelsea FC	ENG	18,000	30,000	17,000	33,000	25,000	123,000	21,328
6	FC Barcelona	ESP	25,000	30,000	24,000	20,000	15,000	114,000	19,228
7	Paris Saint-Germain	FRA	19,000	19,000	31,000	24,000	19,000	112,000	12,016
8	Juventus	ITA	23,000	21,000	22,000	21,000	20,000	107,000	15,380
9	Club Atlético de Madrid	ESP	28,000	20,000	22,000	16,000	19,000	105,000	19,228
10	Manchester United	ENG	20,000	19,000	22,000	26,000	18,000	105,000	21,328

るだろう。

そんな日本との繋がり歴史ある世界トップクラブだが、実力はもちろん施設も並はずれていて、日本では全く真似のできないレベルであった。一つは昔からFC Bayern Münchenの拠点であり、現在は会社、そしてトップチームとセカンドチームのトレーニングの場であるSäbener Straßeである。ピッチ5面の天然芝に加え、2つの人工芝ピッチ、トレーニングジムや病院も備えており、トップチームの拠点であるPerformance Centerを構えており、最先端のシステムを導入し、トレーニングからリハビリから治療から全てを一箇所で賄える施設となっている。

それに加えて、2017年にアカデミーの拠点となるFC Bayern München Campusの設立。U-19からU11までのチームに加え、女子チーム、さらにはバスケットボールや卓球チームの拠点ともなる施設であり、スタジアムを含む9面のサッカーコートに、体育館、ミニサッカーコート、ビーチサッカーコート、フィジカルトレーニング用ピッチ、GKトレーニング用ピッチ、最先端テクノロジーを駆使したトレーニング場skills lab、コーチングスタッフなどの仕事場であるクラブハウスに、寮、トレーニングジム、食堂、レストラン&バーを完備している。公式戦を行えるスタジアムでは、規模は小さいものの、トップチームが試合を行うAllianz Arenaの設備と同じように、アナリストデスクから映像を監督部屋やロッカールームに飛ばす事ができ、ハーフタイムに映像でのフィードバックが簡単に行える環境が整備されている。U16以上は、チーム専用の天然芝のトレーニングピッチがあり、試合や休養などを意識して、必要な時間帯にトレーニングが行える。またU17以上は、スタッフの個室が用意され、そこには監督とコーチのデスクがあり、スタッフミーティングやトレーニングの打ち合わせ、対戦相手の分析ミーティングでは、他のスタッフがその部屋に集まり、好きなタイミングでミーティングができる環境であった。

ユース年代でこのような環境を持てるのは、日本では今の所なく、スタッフは非常に集中して働きやすい環境がある。スタッフの括りで日本と違う点を感じられたのは、このチーム部屋には監督とコーチだけが居て、GKコーチは、全ユースカテゴリーのGKコーチと同じ部屋であり、フィジカルコーチはトレーニングジム併設のトレーナーと同じ部屋であるという部分だった。日本では、チーム単位で一緒になる事が多いが、FC Bayern München Campusでは、チーム以上に縦の繋がりを重要視しているのか、選手の継続した引き継ぎの必要がある部門は、そのような配置にしているのかもしれない。その分、日本ほど、フィジカルコーチやGKコーチのチーム戦術やトレーニングの関わりは少ないと感じた。これはドイツのスタンダードかと思われる。

Säbener Straße とFC Bayern München Campusで合わせて3つの食堂があり、一つはトップチーム専用、一つは社員、セカンドチームのスタッフ、病院のスタッフ用、もう一つはCampusにあり、そこはCampusで働くスタッフと女子のトップチームの選手及び寮生活をする選手が食事をできる。栄養がしっかり考えられ、メニューが1ヶ月近く同じになる事がなく、とても美味しいご飯が提供されます。一食いくらというわけではなく、全てクラブが支払っているようで、そこにも働く社員やスタッフへの待遇の良さを感じられ、働きやすい環境、集中できる環境に繋がると感じた。食堂では、スタッフのコミュニケーションの時間を大切にするた



Säbener Straße



FC Bayern München Campus

め、携帯電話の使用を禁止にするなどのルールもあった。食事中はしっかりコミュニケーションを取る一方で、仕事中はあまり話をせずに黙々と集中して取り組むためか、多くのスタッフの帰宅はとても早く、夏休み中は練習も午前中のため、午後3時くらいには、ほとんどのスタッフが帰宅していた。研修を始めて1週間の自分がその日の作業が残っていても、みんな先に帰ってしまい、一人クラブハウスに残って作業したのは、最初の驚きであった。

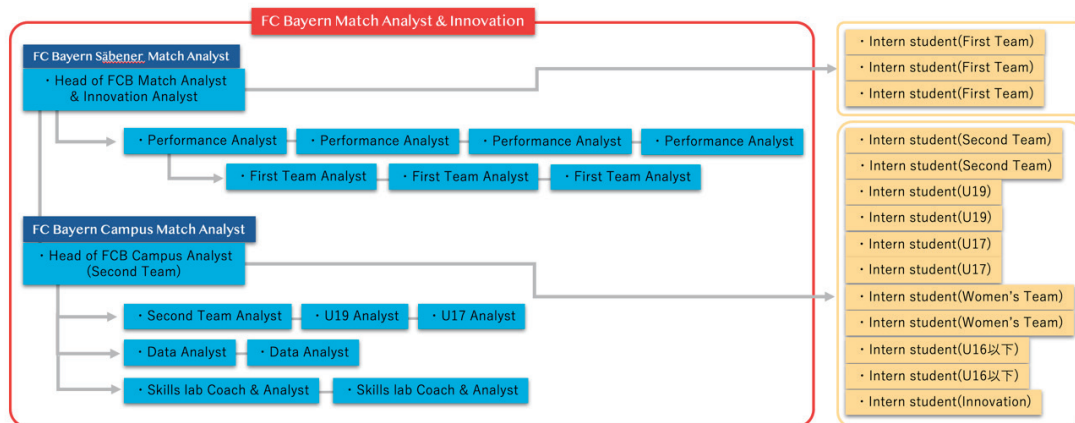
## （2）アナリストグループの分析方法と役割

### ①アナリストグループ組織

私が最初に研修を行ったアナリストグループはMatch Analysis & Innovationという部門名であり、役職はMatch AnalystからPerformance Analystと試合を分析するところから、さらにトレーニングやデータなどあらゆるものを使ってパフォーマンスを向上させるためのアナリストという名前を付けるようになってきていた。世界的にもPerformance Analystと名付けるところが多いが、日本では、まだコーチングスタッフの一員のような中で分析を主の仕事とするスタッフが多いため、アシスタントコーチという名前であったり、テクニカルスタッフという役職名となっている。Performance Analystは、どちらかと言うとピッチでコーチングスタッフの一員でトレーニングをサポートというより、映像やデータ、便利なツールやソフトウェアを使い、別の角度から選手のパフォーマンス向上のために仕事をしているというイメージである。日本では、まだこのような専門性が、より秀でたアナリストは少ないが、世界的には、より専門性が求められる職としてアナリストが確立してきている。サッカーを指導する学びの入り口として、アナリストを担うのがスタートだった昔に比べて、今はデータ会社やPCツールを効果的に使えるような人がアナリストとしてチームに入ってきている印象がある。FC Bayernもサッカーそのものを見て学んで、または育成年代でコーチとしての経験がある人材とデータなどを扱える能力を持った人の両方がアナリストとして働いているようであった。

アナリストだけを考えると世界のクラブも同じように揃っているし、とりわけ人数が多いとも感じなかった。イングランドの方がアナリストの数はもっと多いが、ここFC Bayern Münchenは、必要最低限の数という感じであった。もちろん日本に比べれば、多いが人数だけでなく、組織としての強さ、仕事の効率化、ストラクチャーが

かなりしっかり組まれているという事がよくわかった。アナリストグループの組織図は以下のようなであった。



初めは何人のアナリストが関わって、どんな仕事をしているのか、なかなか全体像が見えてこなかった。活動を共にして、見ていくうちにグループの名前の中にInnovationと入っている理由もよくわかった。ここではチームについてMatch Analystとして仕事をする人と、これからこの分野の発展に遅れをとる事なく、むしろ先を行くために、何が今必要で何を改善すべきかを考えて仕事をするアナリストがいることがわかった。まさに、「今」の仕事と「未来」の仕事を同時に行っていた。それがまさにグループ名のInnovationの部分であった。特に「未来」の部分の仕事をするアナリストは、皆First Teamのアナリストとして働いた経験を持っていて、そこでの経験を元に、今の技術の発展を取り入れながら、またアナリストの持つ仕事の膨大化に合わせて、このような組織にして人を増やしていった。チームのアナリストは仕事も多く、「今」の仕事に全力で取り組む必要があるため、それだけになってしまう。それでは「未来」の部分を考える余裕がなくなってしまう、世界に置いて行かれてしまう。だから、少し人数を増やして、「今」と「未来」の両方の仕事をできるようにしていると話を聞いた。この部分は素晴らしい事であり、すぐにでも取り入れたい考え方であった。

そして、この2つの仕事をアナリストがするためにサポートしている多くのインターンの大学生が在籍していた。週20時間（休暇中は40時間）という制限の中で、ヘッドアナリストが仕事を割り振り、シーズンを通して、担当チームに各2人から3人付き、チームのアナリストをサポートしていた。主な作業はトレーニングの撮影、トレーニングのタグ付けからアップロード、試合の撮影、試合の分析からタグ付け、分析会社へのデータ取得のための資料作り、対戦相手の分析資料作りと、かなり膨大な作業ではあるが、アナリストが仕事をする土台を学生が作りサポートしていた。これによりアナリストは時間を大幅に確保でき、分析の質の部分に大きく時間を作れる。非常に素晴らしい取り組みであり、インターンを取り入れる部分は少しずつ日本のJリーグクラブでも取り入れてはいるが、これほど大規模にインターンを入れてサポートしているところは、世界のクラブでもあまり無く、我々も取り入れたいサポート体制で

あった。この組織の整備、構築の部分は研修中からも話し合い、実現に向けて色々な計画をしている。

## ②分析におけるストラクチャー

①で組織の全体像を説明したが、ここでは分析作業におけるストラクチャーについて報告したいと思います。FC Bayern Münchenのアナリストグループにおいて、このストラクチャー（仕事のフォーマット化、システム化）は素晴らしかった。特に学生が行う作業において、しっかりと構造化されており、人によって大きく差が出ないように、フォーマットから作業の流れと、全てが整った状態であった。またアナリストも監督が変わったりする時に、シャッフルして他のチームを担当させたりしているので、幹の部分は統一されており、枝葉の部分はその監督、コーチや選手スタッフに合わせて、それぞれのアナリストが変化をさせていた。

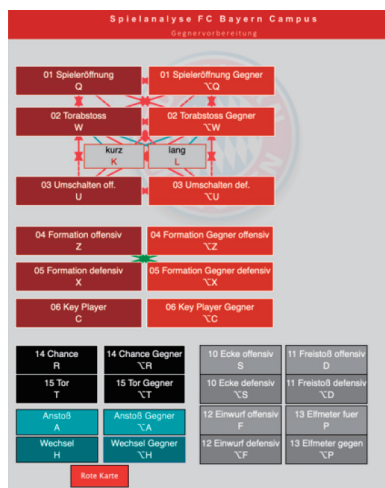
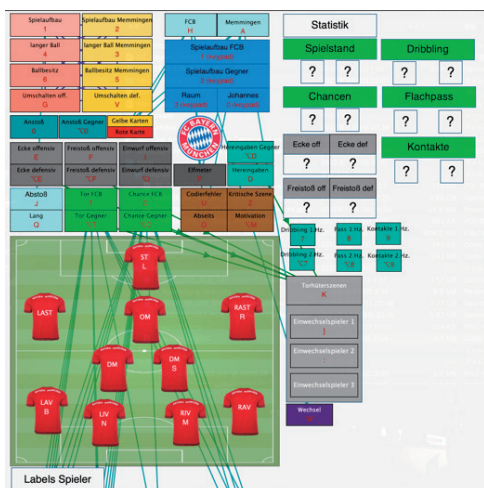
まず、分析レポートを作るためにフォーマットがしっかりある。それを元にどのポイントを見て分析するかが整理しているため、学生が取り組みやすくなっている。映像のタグ付けを含めて、見るポイントが統一されていて、試合を分析するというよりは、まずは細かく定義を決めた中でサッカーを分解して分類していく。そして、その資料やビデオをまとめ上げたところから、アナリストが自分達のチームの状況や監督、



学生がまとめる資料の表紙



学生がまとめる資料の中身



全体で共有されているSports codeのコードウィンドウ

コーチの意見を元に、その時々に合わせて拾い上げる部分を多少変えながらも最終的なものを作り提示して監督やコーチにプレゼンをする。日本の場合、ここからスタッフの意見を取り入れて分析ビデオや資料を完成させて、選手にプレゼンをするのがアナリストの仕事である場合が多いが、FC Bayern Münchenを含め海外の多くのクラブは、選手に伝える事の全ては監督からというところが多い。アナリストの情報、意見を元に、監督自ら試合を見て分析して感じたポイント、それに対してのプランを監督が選手に伝えていく形である。チームアナリストは自チームの分析をメインに行い、チームの成長や課題、個人の課題などを分析し、映像を作って課題を多くのスタッフで共有していく。そこに一番の大きな時間をかけるため、対戦相手の分析の基礎、分類までは学生に任せ、そこから作り上げていく。これは育成年代だからであり、U19やU17ではリーグ戦ではもちろん相手の分析を取り入れるが、重要度としては、分析からチームへのサッカースタイルを変える部分までは入らず、チームの成長、積み重ね、選手の成長と課題克服のためにサポートする部分であり、選手の成長のために試合であり、試合でプレーするための判断材料として相手の情報が必要であるといったところであった。ただ、セカンドチームやトップチームではより、相手の情報が重要になり、特にFC Bayern Münchenは相手が特別に対策を立ててきたりするチームばかりの試合になる。分析通りに相手が戦って来てくれるというわけではないので難しい部分があるが、そのあたりも監督は考えながら試合プランを考えて作り、落とし込んでいくのであろう。それとは逆にU16以下は相手の分析はアナリストや学生は行わず、自チームの選手の全ての映像にタグ付けをする。それらを元にコーチが自チームの選手を分析したり、今後成長してく上でのデータベース的役割も含まれているであろう。育成年代の選手の全てのプレーをタグ付けしておけば、その選手が将来トップチームの昇格した時に、その選手の育成年代の時のプレーが簡単に検索でき、そこでの比較や基準を作る事ができる。そういう意味合いでも前項で述べた「未来」への部分の作業を育成年代においてアナリストは活動していた。この試合に対する分析においての考え方は、特に日本と相違はないが、「未来」のために残しておく部分は大きく、あらゆる角度から選手を分析し、残しているというのは強く感じた。データを含め、情報を多く持って整理しておくことが「未来」のためにとっても必要な事だと改めて強く思った。

### ③トレーニング・試合の撮影

我々アナリストにとって、映像は最も重要な材料であり、試合やトレーニングを撮影することは必須となる。昔は、三脚にビデオカメラを付けて人が撮影していたが、カメラ分野の発展により大きく進化している。ヨーロッパのクラブではトレーニングピッチやスタジアムの高い位置にカメラが取り付けられていて、それを室内から撮影する事が可能となっている。FC Bayern Münchenも同様、First Teamの練習場には15個のカメラが取り付けられ、同時に4つのビデオが録画できるため、ポジション別トレーニングやグループ分けでのトレーニングにも対応できる。全体トレーニングでは、行われるピッチの場所によって一番見やすいアングルを見つけて撮影する。ある程度ピッチを分割した部分を使う想定で、事前に設定されたピッチ図があ



練習を撮影する学生



撮影するためのCampusのアナリスト部屋

令和3年度・短期派遣（サッカー）

り、そこを押せば、一瞬にして、そのエリアが一番見やすいアングルとカメラにスイッチされる。カメラも監視カメラのようなものとAIカメラの2種類が導入されており、常に最高のアングルが録画できるようになっている。質の良い映像は、良い分析に影響する。選手が見返すにも見るモチベーションに繋がる。そして、フィードバックで使用する際も伝わる量が変わってくる。単純に撮影してではなく、良い画質、良いアングルは、分析、フィードバック、蓄積に大きく関わってくる。この部分は日本でもだいぶ進化してきているが、育成年代では、まだまだお金の問題で導入は少ない。育成こそ、このようなカメラシステムを入れて、撮影することが望まれる。またFC Bayern München Campusでもトレーニングピッチとスタジアムにはカメラが取り付けられており、試合時にはスタジアムに隣接するアナリスト部屋からカメラを操作して撮影する。その映像はベンチ裏のアナリストデスクにSDIケーブルで届いており、ライブコーディングを簡単に行える設備となっている。ヨーロッパでプロチームの試合が行われるスタジアムでは、このような事ができるように整備されてきているが、日本のスタジアムはほとんどない状態である。設備整備には色々な問題があるが、そのような設備が入ってくるスタジアムが増えてくる事を今後は期待したい。

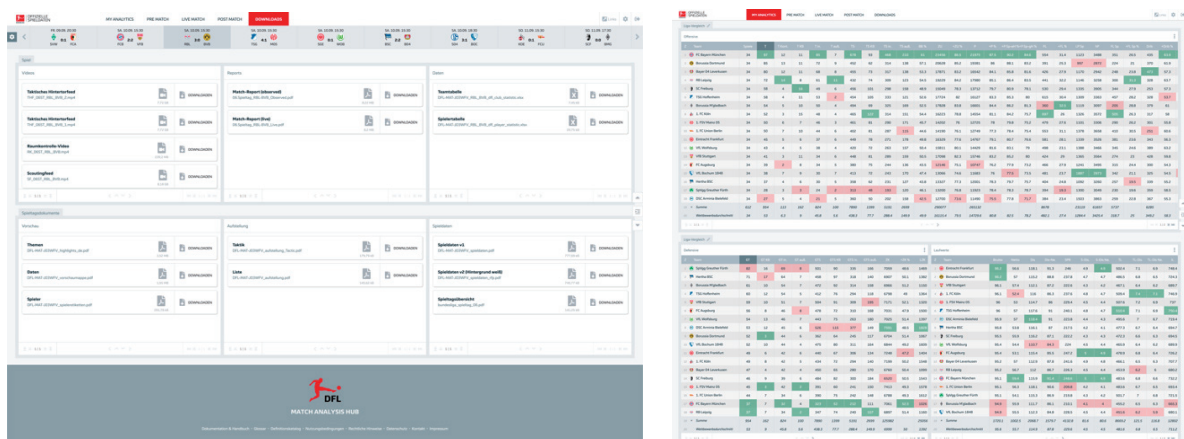
#### ④First Teamにおける分析

First Teamにおける分析作業もベースはユースと変わらない。しかしアナリストを3人体制にして、2人が対戦相手の攻撃と守備、1人が個人の分析及びデータからの客観的分析を行う。またデータ会社と契約し100枚を超える対戦相手のレポート受け取っている。ここから必要な部分をピックアップし、また学生がまとめた全体の分析レポートからも必要な部分をピックアップして、資料を作っていく。また映像も同じように学生が分類した映像から必要なものを拾っていき作り上げていく。まとめた分析をまずはコーチに前節の試合前日にプレゼンして擦り合わせる。そして、週明けに監督とその他のコーチにプレゼンをし、修正や付け足しが行われた後に監督がそれらの資料を元に、自分達の戦い方、ゲームプランも少し入れながら選手にミーティングとトレーニングで落とし込んでいく。流れとしては、多くのクラブと変わらないが、ヨーロッパのトップクラブとなると自国のリーグとカップ戦に加えてヨーロッパのリーグがあるので、直近の試合を見る前にほとんど分析資料を作り上げていくといった感じであった。向こうではイングリッシュウィークと呼ばれる週の中日と週末に試

合のある日程の事で、それが続く事もある。移動も考えると、対戦相手の分析は常に先回りして行っていく必要がある。その時間との戦いの中でやっているにも関わらず、ストラクチャーがしっかりしているから、遅くまで毎日残って仕事をしているわけではない。リーグ戦であるから、どこにどんな情報があり、どの情報はここから取ってきて、この資料に付け足してと、8割くらいがフォーマット化されている印象であり、それが仕事の効率化とスピードを生み出している。そして、それを手助けするべく効果的な分析ツールやソフトウェアを使って分析を行っている。イングランドのプレミアリーグのチームも多く活用し、私もそのソフトは知っていたが、やはりそのソフトが持つ力をしっかり使えば、ものすごく効果的であるということはよくわかった（値段は非常に高いのと、データをどう取得するかという問題はあるが）。



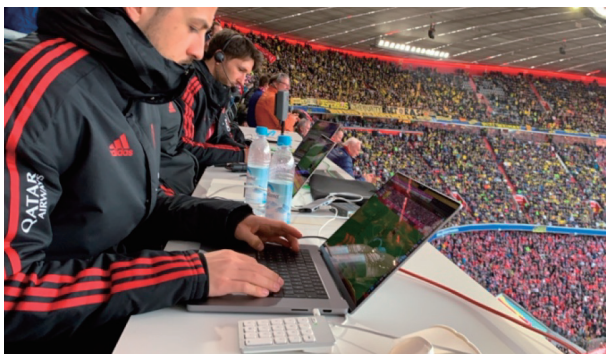
これはそのソフトの一画面であるが、映像とプレーデータ、トラッキングデータの全てのデータがリンクしていて、全てのプレーが可視化され、数字となって算出される。これにより、試合の組み立ての傾向などが、直感的にまた数字でエビデンスとなって読むことができるため、試合映像を見なくても、チームの傾向は見える部分が多くある。もちろん数字をクリックすれば映像が出てきて、すぐに確認する事ができる。どの試合を読み込んで、どのデータをプラットフォームに出すかは、全てアレンジできる。これらは、分析を始める前に大まかなポイントを見ることで、予測を持って映像分析を始められるという使い方と、自分が分析した後の答え合わせのような使い方ができる。これを使いこなすことで、多くの情報が「見える」ため、とても有効である。



ブンデスリーガのデータベース（試合映像や情報、データが入っている）

分析において、フォーマット化されたものがあるため作業が早いと述べたが、リーグであるからこのような事ができるとも感じた。前頁の写真のようにブンデスリーグから試合映像やデータが配られたり、選手の情報がまとめられているサイトや、トップリーグであるため、データ会社が確実にデータを試合後の非常に短い時間で取得し提供できるという部分もある。ここは代表チームやアジアではまだまだ難しく、データが簡単に手に入らないと、上記で述べた素晴らしいソフトも使う事ができず、自分達で作業を行わないといけないため、どうしても時間がかかってしまいます。また代表チームは、常に対戦国も違えば、地域も言葉も違う。情報をまずは取得するために、どこにその情報が載っているかを探す必要があり、映像も一昔前は簡単に集める事ができなかった。そのような点で、代表の難しさもある。ブンデスリーグやFC Bayern Münchenのように全てが整備された中で自分がどのように作業を行えるのかは試してみたいと強く感じた。

試合中におけるライブ分析のための設備は、FC Bayern München Campusの設備で述べたようなものが当たり前であり、カメラアングルも6個の中から必要なものを使って行う事ができる。現在はまだ各チームのアナリストが自分達でタグ付けをしながら、その場で分析を行い、どこに問題が起きているかを確認し、ベンチに伝えたり、ハーフタイムに映像でフィードバックを行っている。昨シーズンは、ブンデスリーグのトライアルとして、sports codeのライブコーディングを自動で行うという事をしていた。まだまだ項目が少なかったものの、ここも自動化されたら、より試合をしっかりと見て、データなどで見えない部分や相手との噛み合わせなどの定性分析ができることになるだろう。常に進化しているこの分析分野で今後より高度な分析ツールを効果的に使用してチームを助ける事ができるアナリストというのが求められてくると思うが、一方で、サッカーそのものをしっかり理解していて、知識もあり、分析できて伝える事ができるアナリストが、やはり監督からは重宝され、その後のアナリストのキャリアアップにも繋がっていた。専門的な知識があるアナリストはアナリストとして地位を確立し、その分野の発展に貢献しているが、サッカーを定性的に見て分析するタイプのアナリストは、その後コーチになっていく流れはドイツでもあった。現に、FC Bayern MünchenのFirst Teamのアシスタントコーチはナーゲルスマンが初めて監督になった時のチームのビデオアナリストであり、そこでの仕事が評価され、その後移籍するチームに常に一緒に動き、役職もコーチになっていった。コーチである



スタジアムにおけるテクニカルデスクとピッチアングル

が、やはり分析にも優れているため、試合の日はスタンドのアナリストデスクでライブコーディングをしながら、ハーフタイムのフィードバック映像を整理していた。長年、監督と仕事をしているため、一番監督のサッカーを理解しているし、監督もそのコーチを信頼しているので、自チームの分析はそのコーチに任せていた。この組み合わせは、私の中では非常に理想的であり、日本のクラブにおいてもそのような形が少しできてきている。よりそのコーチが分析も駆使しながらのチームをサポートしていく仕事をし、それに対して新しい名前のコーチを作れないかという事は考えるきっかけになった。

### (3) 各チームにおけるトレーニングと選手育成マネジメント

研修中の一年間、平日はトレーニングを視察し続けた。メインはセカンドチームとU19チームであったが、それ以外にU17や女子のトップチームもよくトレーニング視察した。時にはU16、U15、U14といったカテゴリーの練習を視察した。平日は学校の授業があるので、基本は夕方からどのチームもトレーニングがある。それぞれのチームが専用のトレーニングピッチを持っているので、どのチームも17時30分スタートでトレーニングを行っていた。トレーニングを視察して感じた事は、①ゴールをセットしたトレーニングが多い②強度の高いトレーニング③守備のプレッシャーの速さ④トレーニングメニューの日本との違い⑤選手達の競争力⑥クラブならではの、カテゴリーを超えた融合の素晴らしさ、であった。

#### ①ゴールをセットしたトレーニングメニュー

例えばポゼッションのトレーニングにおいても、ゴールがセットしてあり、何本繋いだらシュートしていい、守備はボールを奪ったらシュートしていいなど、いろんな条件の設定がありながらも、ボールを回しながらも目的がゴールという意識の中でトレーニングしているようだった。ただボールを保持するトレーニングでは終わらず、ゲームを意識したものであるが、様々なオーガナイズと条件を変える事で多くのメニューを持っていた。

#### ②強度の高いトレーニング

少なくともU15以上はトレーニングでもGPSを装着し、トレーニングの強度を確認していた。U17以上であれば、常にフィジカルコーチがリアルタイムでGPSのデータを確認していた。そして、そのフィジカルコーチの意見を元に、監督はトレーニングの量をコントロールしたり、合間にスプリントを入れたりして、必要な指標の強度に到達させるためのGPSデータのチェックと試合に向けて強度を上げすぎない、やりすぎないためのGPSデータのチェックをしていた。ドイツのサッカーは1 vs 1を表すツヴァイカンフという言葉がある。ドイツサッカーはこの「ツヴァイカンフを制するものがサッカーを制する」という思想が根強く残っているようであり、サッカーの試合を見ても、解説者から度々この言葉が出てくる。1 vs 1でボールを奪う、奪われないという元にサッカーを行っている部分があるため、常にトレーニングは激しく、強度が高く感じられた。トレーニングのテンポもよく、あらかじめセットされた

メニューを流れるようにこなしていく中で、フィジカルコーチの管理を加えながら常に強度の高いトレーニングが繰り返されていた。日本のトレーニングと比べても、この強度の部分は非常に違いがあると感じた。

強度を特に注目したが、プレーの質も勿論高い。特にドイツのパスはいかに強くて速く、仲間に届けるかを意識しているようであった。そのため、とにかくパススピードが速い。多少浮いていても構わない。それをコントロールしないと試合に出ることは難しいため、選手もボールが止まる。もちろんそのスピードでやらなければ、パスが通らないプレッシャーの中でやっているのもあるが、日本の選手は質の良いパスを常に同じところに一発で置いてプレーできることを目指しているが、ドイツはとにかくどんなパスも自分がコントロールして、次のプレーをできる場所に置くことを目指しているように感じた。そこには常にボールを奪いに来られるというプレッシャーが伴っているために、試合でも同じ事ができる。日本の選手は非常に技術が高く、うまい。しかし、このプレッシャーの中でこれほどの速いボールをコントロールできるかと言われると、まだまだその技術は足りないと思う。ボールを奪われない置き所も意識しないと、相手関係なく、ボールをコントロールしては、試合では使えない。より試合で発揮できる技術を習得しながら、元々持ったテクニックの高さにプラスしていけば、もっと若い年代でもこの強度の高いトレーニングでも、十分やっていけるだろうと感じた。

### ③守備のプレッシャーの速さ

②の強度の高いトレーニングに繋がるが、トレーニングにおいても守備のプレッシャー、アプローチ距離というのは非常に近いと感じた。日本だと、どうしても手前で止まってしまうことが多いが、ドイツは人にぶつかるまでいく。誰もがボールを奪いにいくという感じである。一発で交わされてしまう事もあるが、2人、3人と同じようにボールを奪いに行く。日本であると、どうしても一発で交わされるなど声をかけられて、ボールの移動中に寄せきれなかったりというプレーが多いと感じるが、ドイツでは止まらない、常に奪う、奪われない文化の中でプレーしている。その中で常にトレーニングしているから、ボールを奪うスキルや球際も強ければ、奪われないボールの置き所やボール運びが非常に優れていると感じた。セカンドチームに合流した時に現役時代に日本人選手と同じチームでプレーした事があるGKコーチに、日本人はなんでトレーニングでぶつからないの？そして、ぶつかったらなんですぐに謝るんだ？と聞かれた事は非常に印象的で、その部分は明らかにドイツとは違う文化であるということは、多くの選手も気付いているのが良くわかった。

研修を始めて最初は、正直FC Bayern Münchenのユースの選手は、そんなに並はずれて選手もいないし、日本とそんなに変わらないかなと思っていた。しかし、毎日見る事に違いを感じた。明らかに強度が高いし、守備が激しい。この研修中に数人のユースの日本人選手が練習参加した。その全ての選手が言っていたのは、守備が速い、守備のアプローチの距離が違うし、止まらない。プレッシャーがすごいと言っていた。日本人の選手が参加した事で、選手の比較もできたし、改めてFC Bayern Münchenのユースの選手達の基本の技術の高さを感じた。私にとって、日本人の選手と、そこ

で比較できたのは、自分の思っていた事への答え合わせのようなものになり、非常に有益であった。

#### ④トレーニングメニューの日本との違い

トレーニングメニューは各々のコーチが豊富に持っていて、見ても興味深いものも多かった。非常にシンプルながら、課題をしっかり盛り込んだもの、非常に複雑なルールの中で考えながらやらせるメニューも多かった。ドイツの選手は、あまりコーチの言うルールを理解していなかったり、間違えたりする事がよくあった。私でも理解できているドイツ語でもドイツ人が理解していなかったり、聞いていないのか、よく間違える。間違えても別に平気なのだが、そのトレーニングで何をするかを理解するのは日本人の方が長けていると感じた。ドイツの選手は本能、本質を落とさないような常に目的にダイレクトである部分は、日本人には少し足りない点だとも改めて感じた。トレーニングメニューをうまくこなせる日本人と、そのメニューを超えてサッカーの本質や目的にダイレクトなドイツ人といった違いが多少とも見られた。First Teamのトレーニングでは初め15分弱ウォーミングアップを行った後、次のトレーニングが、いきなりGKを入れた8vs 8のゲーム形式だったり、トレーニングの組み立てやオーガナイズでも違いは多く見られた。ゲーム形式でもコーナーの4つ角が切り落とされていたり、砂時計のような形に切り取られたピッチでゲームをしたり、全てそこに獲得させたいものが出てくるようにトレーニングを組まれているのだが、あまり日本でも見た事がない形や、あえてゲームでは起こらない状況を入れたりして、対応力をトレーニングさせたりもしていた。

Second Teamの監督はMartín Demichelis氏であり、彼はFC Bayern Münchenのレジェンドメンバーの一人であり、Manchester Cityなどでもプレーし、2014年のワールドカップ準優勝メンバーでもあるが、多くのプレー経験と多くの監督のもとでトレーニングをしていたため、トレーニングメニューも他のカテゴリーのコーチとは少し違い、興味深かった。チームの課題も組み込みながら、時には非常に厳しく、時には楽しみながらトレーニングを行っていた。選手個々へのアプローチや叱咤激励なども含めながら選手をマネジメントしていて、とても勉強になった。まだまだ彼自身動けるので、よく選手に混じってトレーニングをコントロールしながらプレーしていたが、そのプレーは選手含めても一番うまく、冷静で、ポジショニングや予測力など、プレーを見ても、とても勉強になり、唸ることも多かった。また、非常にオープンな性格な方で、合流最初は遠慮していたが、すぐに横で練習を見ろと、ピッチに入り間近で見させてくれたりと、トレーニングをサポートしながらも、選手の動きや質、コーチングを真横で見させてもらったのは、非常に有益な時間であった。



Martín Demichelis氏と

#### ⑤選手達の競争力

FC Bayern Münchenの選手達の競争力がトレーニングの強度や厳しさを作り出し

ていると言っても過言ではない。とにかく選手は、自分のプレーに納得がいていないと、一人でキレている。そして、それがまた激しさを生む。時には選手同士が揉めそうな時もあり、削り削られといったプレーがトレーニング中も良くある。監督がそのあたりの選手の不満を爆発させながらも見守り、選手のヒートアップした意見も冷静に聞き、プレーでぶつかり合っただけで倒れても、「それもサッカーだ、続けろ」と言ったり、監督の許容範囲がとても広いなと感じた。ギリギリのところまでは選手を見守るといいうか口を出さないで、トレーニング後に1対1で話してコミュニケーションを取ったりと、非常にうまく選手をマネジメントしているなと感じた。選手自らトレーニングを盛り上げていくようなプレーが多い。日本のように声出して盛り上げてと言うわけではなく、選手達がお互いでプレーの質や強度を高め合いながらトレーニングを作り上げていくような雰囲気は素晴らしかった。やはり、そこにはチームでありながらも全ての選手がライバルという意識もあるだろう。FC Bayern Münchenのようなトップクラブでは、スカウトされたら誰しものが入ってプレーしたいと思うだろう。知名度もそうだが、選手の質、環境、サポート体制、どれを取っても素晴らしいものが揃っている。その中でプレイしたいという強いモチベーションで多くの選手が常に周りでは狙っている。なかなかプレーの機会が与えられない選手は半年で移籍し、また新しい選手が入ってくる。私も研修当初U19の中で少し力が足りないと思っていた選手は、その冬に他のチームに移籍して行った。日本のように試合に出られなくても、応援でもそのクラブ、チームにいたいと考える選手が多い中、ドイツではまず自分がプレーできるチームを選ぶというのが当たり前である。そういった移籍のしやすさもちろんあるが、FC Bayern Münchenのようなトップクラブだと、やはり力が足りないと落とされていくといった感じであろう。シーズン中も、時には毎日のようにユース選手と家族と代理人御一行がスカウトに紹介されながら施設を見学しているところをたくさん見かけた。常に良い選手をスカウトがピックアップし、常にダメだったら、次に良い選手が、すぐ後ろに控えているという状況にある選手は、少しでも気を抜いたり、活躍できないと出れなくなり、このクラブから去らないといけないという競争力でプレーしている。それとは逆に、良い選手は直ぐに上に行ける。First Teamにトレーニング参加して、監督が気に入る、そのままFirst Teamに残ってプレーしている16歳の選手もいる。活躍できなければ落とされる、活躍すればどんどんステップアップし、飛び級していけるクラブの体制もあって、選手の競争力はかなり激しい。この競争力、トレーニングの厳しさは是非日本でも日常化してほしいし、この厳しい環境で選手が考えて行動しプレーを変えていけば、日本の選手はもっともっと高みを目指せると感じた。

#### ⑥クラブならではのカテゴリーを超えた融合の素晴らしさ

FC Bayern Münchenのカテゴリライズとしては、①First Team②Second Team（ドイツ4部レギオナルリーグに出場）③U-19④U-17⑤それ以下は一歳ずつチームがある（U-16.U-15.U-14…）。First TeamとSecond Teamは同じ施設でトレーニングし、インターナショナルマッチウィークでほとんどの選手が代表チームに行っている時は、多くのSecond Teamの選手がFirst Teamに合流している。そうでない時も、怪

我人などで足りないポジションがいると、下のカテゴリーから呼ばれて参加する。これは日本でもある事だが、特にGKが上のカテゴリーのトレーニングに参加することが多く、途中までFirst Teamでトレーニングして、そちらが終わったらSecond Teamに戻ったりと臨機応変にやっていた。First Teamの試合で出番の少ない選手はSecond Teamの試合に出ることもあり、選手のプレーの場所をしっかりと確保するために、各チームで連携して行なっていた。2021-22シーズンはコロナや怪我人も多く、よくGKは上のカテゴリーのトレーニングに呼ばれ、下も同じように上がっていくため、U-17のGKがトレーニングにいなくなった時はU-19の女子のGK選手が参加していた。縦の繋がりで移動するのはあるが、女子も含めて連携がなされており、補い合うのは素晴らしかった。ただ、補填だけではなく、女子選手からすると、普段とスピードが違ったり、タイミングが違ったりとするため、非常にトレーニングになる。女子も同じように代表ウィークで多くの選手が抜けて、トレーニングの人数が少ないと個別トレーニングになったりするが、そんな時に女子のTOPのGK選手が参加したりしていた。そして、そのような時は、女子のコーチも男子チームのトレーニングを観ながら、その男子チームのコーチと共に、その選手にアドバイスをしたり、指導していた。カテゴリーだけでなく、男女の垣根もなく連携し合い、トレーニングを行えているのは、勿論同じ敷地で同じ時間にトレーニングしたりするため、簡単に他のピッチに行けて参加できるということもあるが、素晴らしい取り組みであった。またGKは昼過ぎから多目的ピッチでGKコーチと1 vs 1でトレーニングしているのを毎日のように見かけた。毎日同じ選手ではないが、全体トレーニングでは足りない部分を、特にテクニックのところを、昼の時間に個別でじっくりとトレーニングしていた。学校などもあるが、うまく時間を作って課題を克服するためにトレーニングしているところはとても印象に残っている。

また優秀な選手を上のカテゴリーに飛び級する時もあるが、そこは慎重に議論して行っていた。一番大事なのは、選手が試合でプレー出来る事。それが一番に考えている。今のカテゴリーで余裕を持ってプレー出来るなら、一度上のチームに入れてみて、それでも良ければそのままチームに残してプレーさせる、まだ早いと感じれば、また下に戻してトレーニングする。それを繰り返す事もある。基本的にはU-17から飛び級という形が入ってくるが、上のカテゴリーということは2歳上になる。メンタリティーも大事で、自立していなく、ただ、周りについていくようでは難しい。なので、そのような選手には、自分の年代のカテゴリーでリーダーシップのようなものもしっかり身につけてほしいためにアプローチしていた。上のカテゴリーに上げるかどうかは、まずチームスタッフなどスモールグループでディスカッションして、徐々にダイレクターなど増やして行って議論を重ねていく。2021-22シーズンの途中からPaul Wannerという選手がU-19からFirst Teamに合流した。当時は17歳になったばかりだったが、ナーゲルスマンに認められ、そのまま残る形でその後トレーニングや試合も全てFirst Teamに帯同した。しかし、公式戦の出場は後半ラスト数分であったりと、ほとんどをベンチで過ごした。シーズンの終わりにU-19がカップ戦の準決勝に進出し、大事な試合でその選手を戻しプレーさせた。しかし、試合が進むにつれ、存在感が薄くなり、途中で足を攣り、満足なプレーは見せられなかった。大事

な時期に試合時間が全く足りていなかった。だから、今シーズンは試合環境を用意。Second Teamで出られないなら、U19で用意。まだ年齢的にU19でプレーできるため、トレーニングはFirst Team、試合はFirst Teamでメンバーに入らない場合は、U19でプレーさせていた。全ては試合でプレーさせるためであった。だから、下のカテゴリーの監督は非常にマネジメントが難しい。U19に帯同している時もマグレットに10人くらい名前があり、その選手は今週、上のカテゴリーに行っていてトレーニングにはいない。金曜日にならないと週末にどの選手が使えるかわからないと監督が話していた。だからこそ、カテゴリー間の連携が大事である。お互いの監督も試合は勝ちを目指すため、譲らず議論になることもあり、難しさもありながら、その中でマネジメントして試合を戦っていた。選手にとってはとても良いカテゴリーを超えた連携ではあるが、スタッフからは難しい部分があるというのは、チームに帯同して、またゲームを見たり結果を見ても難しい部分は少しあるというのは、よくわかった。全ては選手育成のため、そこはブレずにプロフェッショナルな仕事をしていて、それを間近で見る事ができて、非常に勉強になった。

#### （４）ゲーム環境とゲーム内容

研修の一年間、できる限り多くの試合を観ることに努めた。しかし、ドイツでは2021年11月から2022年3月頃までコロナの感染者がとて増え、ロックダウンをした時よりも数が多く、あらゆる所に規制がかかった。サッカーも例外ではなく、First Teamの試合は無観客になり、その他のチームの試合も無観客や業務のあるスタッフのみと制限された。そんな状況ではあったが、非常に多くの試合を視察する事ができた。FC Bayern München Campusに入れば、土日は必ずどこかのカテゴリーの試合をやっており、試合も時間が重ならないように11時、13時、15時となっており、違うカテゴリーのスタッフが見られるようにスケジュールを組まれていた。女子の試合やU19の試合は平日にあることもあり、多い時には1週間で7試合くらいを観る事ができた。

まずFirst Teamの試合を観る事ができたのは、何より多くのものを見て感じる事ができた。世界最高峰のブンデスリーガ、DFBポカール、さらにはチャンピオンズリーグを日常のように観る事ができた。ホーム戦はほぼ見る事ができたので、時にはDFだけに注視してみたり、ゴール裏から見るときはGKの動きを追うなど、贅沢な見方もできた。FC Bayern MünchenのGKはマヌエル・ノイアーといい、世界トップレベルの選手の一人であり、ボールがない時の準備などはとても参考になり、ゴール裏からの映像をすぐにJFAのGKプロジェクトに送り、講習会などの資料と使ってもらう事ができた。時にはベンチ横の最前列のチケットが割り当てられることがあり、そこでは選手のスピード感、迫力、視線や顔の表情と、そこでしか見られない情報を得ることができた。日本人選手もブンデスリーガのチームには多く所属し、FC Bayern Münchenと試合をする時は、相手側の選手としてどのようにプレーするかも興味深く見る事ができた。Borussia Mönchengladbachの板倉選手がFC Bayern Münchenと対戦した時は、このハイプレスの中でどのようなプレーをするか楽しみであったが、全く慌てずにしっかり周りを見て落ち着いてプレーしていた。顔の表情も良く見え、

これだけ落ちて良いパフォーマンスを出していたので、ワールドカップも非常に期待できるなと感じた。少し話は変わるが、日本代表として戦う時の相手選手は、ブンデスリーガをはじめ世界最高峰のリーグでプレーしている選手ばかりである。やはり、このような選手と日常の試合で対戦しているということは、どれだけ日本代表として試合をするときのプラスになるのかは良くわかる。現在の日本代表の多くの選手が海外のチームに所属し、世界一のレベルであるヨーロッパチャンピオンズリーグでプレーもしている選手が増えている事は、明らかにプラスであり、日常の試合と代表の試合で大きな差もなく戦えるのは非常に大切である。選手もそうだが、我々スタッフもこのレベルの試合をスタンダードに意識している必要があり、このレベルを見続けて、自分のサッカーのスタンダードを高めることができたのは良かった。2022年5月末には、2021-22シーズンを締めくくるUEFAチャンピオンズリーグの決勝があり、その試合も見ることができた。世界最高峰のリーグの決勝戦ということで、スピードの速さ、プレーの精度、展開や守備の強度など、どれをとっても当たり前だが、素晴らしくあっという間に試合が終わってしまった。レアル・マドリードvs FCリバプールの試合でドイツのチームではないため、また試合の戦いやスピードも普段見ているドイツのサッカーとも違った。日本の子供たちは、このリーグで活躍する事を夢見ている選手が多いので、このレベル、このクオリティーを見て感じる事ができたのは大きい。今後、そこを目標とする選手たちへのアプローチも、私が感じたことも加えてアドバイスやコーチングをしていけると思う。

UEFAチャンピオンズリーグというのはドイツだと前年のリーグの上位4チームに出場権が与えられるが、それに付随してU19がUEFAユースリーグという大会の出場権が与えられる。これはU19チームの大会で、チャンピオンズリーグに出場するチームのU19チームが参加でき、同じグループ分けてFirst Teamが試合をする前にU19チームが試合をする。FC Bayern Münchenは毎年UEFAチャンピオンズリーグに出場しているので、U19チームも自然とこの大会に出場できる。2013-14シーズンに始まった大会であるが、近年はよりこの大会の重要度が各クラブで上がってきて、非常にレベルの高い大会になっている。他の国での上位チームのU19チームであるから、もちろんレベルは高く、このレベルの試合になるとワンコントロールをミスしてしまうと、攻撃のチャンスを失ってしまったり、守備の連続性や強度は国内リーグと比べても、また一段レベルが上がる。またすでにFirst Teamに昇格しているような選手も、上で出場時間が少ないなら、この試合に出す事も多く、ヨーロッパの他の国のU19世代の素晴らしい選手と対戦できるために、非常に選手にとっても経験値を得られると同時に、我々も若い良い選手を見る機会ができるので素晴らしかった。U19なのに、すでにFirst Teamで出場し得点を取っている選手や、15歳などとても若い選手が出場していたりと、試合の内容も面白いが、選手個々を取っても非常に見応えのあるゲームである。とにかく、強度が高く時間とスペースがないプレッシャーの高い中で試合をしている。どうしても日本国内だと、代表以外で海外のチームと試合をする機会は少なく、それも公式戦という形で行われることはほとんどない。ヨーロッパの国は、常に目指すところがチャンピオンズリーグやユースリーグのように国の中だけに収まらず、その先を目指すことになる。世界一のレベルのリーグであり、そこを目指して、

そこに通用するプレーを目指すため、自然と高みが目指せるであろうし、それがそのまま自国のレベルや代表の強化にも繋がるため、非常に羨ましい大会である。

ドイツではU19とU17でブンデスリーグがあり、地域を3つに分けてリーグ戦を行っている。コロナ以降、リーグが少し変則的に行われたりしていたが、国内でも非常に高いレベルの試合が行われている。FC Bayern Münchenだからといって簡単に勝てる試合はあまりなく、常に厳しい試合をしている。カウンターなどは、コントロールをミスしてしまえば仕掛けるチャンスを失ってしまうし、守備も球際は激しく常にボールを奪いにくる強度の高い試合が行われていた。私はU19チームに帯同して、対戦相手についてのスタッフミーティングも参加させてもらっていたのだが、そこでの相手の情報を毎回聞いていて日本との大きな違いや、それらがもたらす影響がある事に自分なりにわかった事があった。まず対戦相手の守備が中盤はマンツーマンマークであった。ほとんどのチームがマンツーマンマークであって、いつもアナリストがマンゲゲンマンと言い説明していた。日本ではマンツーマンのチームはほとんどなく、ゾーンで守備してくる。ゾーンの守備に対しては、間にタイミング良く立てばボールを受けることができる。しかしマンツーマンであると、常にマークをされ簡単にボールを受けることができない。ボールを受けるには、①自分でマークを剥がすか②味方（3人目）を利用してボールを受ける、となる。この両方を身に付けなければ、マンツーマンの守備の中でプレーをするのは難しい。日本人選手は、ゾーンマークの場合に間で受けるのは非常に上手であり、世界の中でも優れていると思う。しかし、マンツーマンになると急にプレーができなくなる。よく育成年代でアジアの国と試合をする時に、マンツーマンの相手になると苦戦するということがよくあった。ドイツの指導者にも日本人は受ける前に周りをしっかり見てプレーするのが教育されているのが素晴らしいと言われた。確かにトレーニングを見ていても、ポゼッションのトレーニングなどでも、間に入った選手は後ろの選手を見てパスコースを開けて、パスを出させて受けると狙ってやっているような選手はあまりいない。常にボールを見ている選手が多い。しかし、試合でもマンツーマンマークであり、そういう状況を理解し、身についているのか、縦パスが入った瞬間にサポートに行く。決して狙ってパスをさせているようには見えないが、連動はしている。ゲーム環境も含めて、選手に染み付いている事なのだろうと思った。あとはドイツでのパスを落とすことをクラッチチェというが、これもこの縦パスに対してサポートを染み付けさせている事に繋がると思った。トレーニングのパス&コントロールなどにパスして落としたボールに3人目がサポートみたいなトレーニングをよくやっていた。ドイツサッカーの一つの特徴だと思われるが、様々な設定の中で、このようなプレーが出るようなトレーニングが多かった。もちろん上のレベルに行けば行くほど、周りを見てプレーする必要があるが、自分を超えて入ったパスに対しては、もう自然とサポートに入るというのが、トレーニングや対戦相手の守備の仕方からも小さい頃から体に染み付いたプレーなのであると思った。日本人が得意なプレーも大事にしながら、守備状況が違う時にも対応できるスキルはまだ必要だと思うし、考えてプレーする以上に環境によって染み付いたプレーは、プレースピードを早めるし、必要な事だと強く感じた。

## (5) 最先端テクノロジーを活用したトレーニングSkills lab

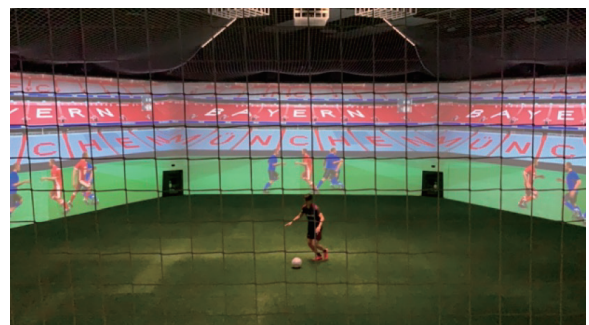
### ①Skills labとは

(<https://fcbayern.com/de/news/2021/03/so-funktioniert-das-neue-skills.lab-am-fc-bayern-campus>)

室内の人工芝ピッチの周りの壁にプロジェクターで絵が映し出され、ボールが周りから自動で出てきて、決められたメニューをトレーニングする最新の施設である。プロジェクターで様々な絵を映し出すことができるため、トレーニングメニューは500を超え、出てくるボールは130km/hまで出せて、浮き球や、スピンのかかったボールなども出すことができる。ピッチ内の選手の動きやボールをセンサーで捉え、プレースピードやプレー精度を全て計測し、データ化される。トレーニングメニューのためにマーカーなどを置く場合もすべて上からどこに置くのか光で指示されて、そこに置いてセッティングをする。選手は、ピッチに映し出された丸に入るとセンサーが感知しボールが出てくるなど、これこそテクノロジーをサッカートレーニングに活かした施設だと感じた。研修初日にこの施設でアナリストのミーティングがあり、参加させてもらい、このトレーニングを少し私も体験させてもらった。10年ほど前にドルトムントが似たような施設を持っていて、それは有名で私も視察で訪れた事があった。その施設をもっとサッカーの様々なプレーに対応したトレーニングができるように改良されたようなものであり、初日からFC Bayern Münchenの凄まじさを見せつけられ衝撃を受けた。

この施設で行う事は、スクリーニングとトレーニングの2種類がある。スクリーニングとは、コントロール、パス、ドリブル、シュート、ヘディングの5項目で決められた同じメニューを年2回すべての選手が行い、データで評価し、ラインキングしていく。チーム内、さらにはすべてのFC Bayern Münchenの選手の中での比較もできる。年齢に応じてボールスピードは少し変わるが、それ以外はすべて同じである。データを蓄積し、伸びているポイントなどが数値化されるため、他の選手と過去の自分と比較ができ、成長をデータで感じる事ができる。

プレーとは別になるが、選手を見ていると、その選手のメンタリティーもこの中で見えてくる。特異な環境の中でプレーをするため、初めての選手は戸惑いや興奮がある。一つのメニューでも何回もプレーするため、どうすれば、より正確なプレーができるか自分で改善できる選手もいれば、ただプレーする選手もいる。うまくいかない時に、どんどんテンションが下がっていき、ミスが増えてくる選手もいれば、そこか



Skills labでトレーニングする様子

らまた自分で復調する選手もいる。メンタリティーの改善にもアプローチできるし、そこは見ていて非常に興味深かった。

もう一つのSkills labsの使用はトレーニングである。女子選手を含むU19以上の選手は1人でトレーニングをするが、U17からU14の選手は2人で、それ以下の年齢の選手は4人でトレーニングをする。セッション事に即座に自分のポイントが壁に映し出されているため、年齢の低い年代では競争を入れながら、楽しみながらでもできるようにしている。トレーニングでSkills labを使う時は、コーチからテクニック改善のためにSkills labでのトレーニングを命じられ、全体練習以外の時間で予約される。1セッション1時間で予約されるが、First Team以外の全ての選手がトレーニングするので、平日はビッシリとスケジュールが入っている。Skills labに専属のコーチが2名（+今シーズンより1名兼任）おり、選手の担当コーチとなり、トレーニングを行う。チームスタッフで選手の課題を話し、その課題の映像を試合中の中からアナリストが編集して作り、それがデータベースを通じてSkills labのコーチが確認し、どんなトレーニングを行っていくかプランを立てる。そして、心理学者コーチの助言のもと、トレーニングの進行をどうしていくのか、とにかくプレーさせて個人で高めてもらうのか、Skills labのコーチがアドバイスを入れながら進めていくのかなど、選手個々の性格的な特徴も踏まえて考えて組み立てられる。ボールスピードから、メニューの難易度からその課題と選手にあったメニューを作りトレーニングしていく。ここでも選手の課題克服のために、コーチ、アナリスト、心理学者、Skills labコーチと多くのスタッフが、その選手達の課題をしっかりと共有し、多方面からみんなでアプローチしていた。それぞれのスタッフがプロフェッショナルに仕事をしながらも、しっかり連携が取れていて、全ては選手の成長のためという認識のもと、仕事をしているのがよくわかった。

## ②Skills labで参加したプロジェクトについて

Skills labで研修を行っている間に、一つのプロジェクトに参加し、作業を手伝い、最後はその結果を発表した。それはトレーニングにおける1選手のプレー回数についてだった。このSkills labでは1時間に240回のプレーがあるのに対して、実際のトレーニングでどれだけ選手がプレーしているかわからない。それは1週間のトレーニングをカウンティングしてみるということで、それらの作業を手伝った。

2021.9.21

TR1 separate 2 Groups  
one side is Physical part  
High intensity  
(Short Time training & many rest)

Training Time: 105min

Average Total1 Without First touch:90.0

Average Total2 contacts:106.0

Per 60min

Average Total1 Without First touch:51.4

Average Total2 contacts:50.6

Without TR1

Average Total1 Without First touch:47

Average Total2 contacts:42.8

Player	TR1	TR2	TR3	TR4	Total
Player 1	15	10	10	10	45
Player 2	10	10	10	10	40
Player 3	10	10	10	10	40
Player 4	10	10	10	10	40
Player 5	10	10	10	10	40
Player 6	10	10	10	10	40
Player 7	10	10	10	10	40
Player 8	10	10	10	10	40
Player 9	10	10	10	10	40
Player 10	10	10	10	10	40
Player 11	10	10	10	10	40
Player 12	10	10	10	10	40
Player 13	10	10	10	10	40
Player 14	10	10	10	10	40
Player 15	10	10	10	10	40
Player 16	10	10	10	10	40
Player 17	10	10	10	10	40
Player 18	10	10	10	10	40
Player 19	10	10	10	10	40
Player 20	10	10	10	10	40
Player 21	10	10	10	10	40
Player 22	10	10	10	10	40
Player 23	10	10	10	10	40
Player 24	10	10	10	10	40
Player 25	10	10	10	10	40
Player 26	10	10	10	10	40
Player 27	10	10	10	10	40
Player 28	10	10	10	10	40
Player 29	10	10	10	10	40
Player 30	10	10	10	10	40
Player 31	10	10	10	10	40
Player 32	10	10	10	10	40
Player 33	10	10	10	10	40
Player 34	10	10	10	10	40
Player 35	10	10	10	10	40
Player 36	10	10	10	10	40
Player 37	10	10	10	10	40
Player 38	10	10	10	10	40
Player 39	10	10	10	10	40
Player 40	10	10	10	10	40
Player 41	10	10	10	10	40
Player 42	10	10	10	10	40
Player 43	10	10	10	10	40
Player 44	10	10	10	10	40
Player 45	10	10	10	10	40
Player 46	10	10	10	10	40
Player 47	10	10	10	10	40
Player 48	10	10	10	10	40
Player 49	10	10	10	10	40
Player 50	10	10	10	10	40
Player 51	10	10	10	10	40
Player 52	10	10	10	10	40
Player 53	10	10	10	10	40
Player 54	10	10	10	10	40
Player 55	10	10	10	10	40
Player 56	10	10	10	10	40
Player 57	10	10	10	10	40
Player 58	10	10	10	10	40
Player 59	10	10	10	10	40
Player 60	10	10	10	10	40
Player 61	10	10	10	10	40
Player 62	10	10	10	10	40
Player 63	10	10	10	10	40
Player 64	10	10	10	10	40
Player 65	10	10	10	10	40
Player 66	10	10	10	10	40
Player 67	10	10	10	10	40
Player 68	10	10	10	10	40
Player 69	10	10	10	10	40
Player 70	10	10	10	10	40
Player 71	10	10	10	10	40
Player 72	10	10	10	10	40
Player 73	10	10	10	10	40
Player 74	10	10	10	10	40
Player 75	10	10	10	10	40
Player 76	10	10	10	10	40
Player 77	10	10	10	10	40
Player 78	10	10	10	10	40
Player 79	10	10	10	10	40
Player 80	10	10	10	10	40
Player 81	10	10	10	10	40
Player 82	10	10	10	10	40
Player 83	10	10	10	10	40
Player 84	10	10	10	10	40
Player 85	10	10	10	10	40
Player 86	10	10	10	10	40
Player 87	10	10	10	10	40
Player 88	10	10	10	10	40
Player 89	10	10	10	10	40
Player 90	10	10	10	10	40
Player 91	10	10	10	10	40
Player 92	10	10	10	10	40
Player 93	10	10	10	10	40
Player 94	10	10	10	10	40
Player 95	10	10	10	10	40
Player 96	10	10	10	10	40
Player 97	10	10	10	10	40
Player 98	10	10	10	10	40
Player 99	10	10	10	10	40
Player 100	10	10	10	10	40

カウンティング集計



Skills labのコーチ

Sports codeでカウンティングできるようにcode windowを作り、ポジションの違う4名の選手をピックアップし、1週間のそれぞれのトレーニングで何回プレーしたのかをカウントした。それにプラスして、そのトレーニングの強度やプレッシャー状況も考え、それらの数が適正かどうかを議論するためのサンプルとして調査した。実際にどれくらいの数値が良いという基準はまだなく、これらのデータが溜まって行けばそのような事も可能だと思うが、練習時間やプレッシャー状況なども考えて、自分の中では少し少ないのではないかと感じた。すでにリーグ戦中であったり、鍛錬期ではないところを無作為にピックアップしたなど、チーム状況は無視しているの、その数が全てではないのはみんな理解している。しかし、試合前などの状況を除いて、いかに試合に近い状況でプレーの回数が多い方が良いわけである。コーチは、どれくらいのプレー回数が的確で、その時の練習がどれくらいのプレー数を確保しているのかは、誰もわからないと思う。感覚的には持っていると思うが、明確ではない。トレーニングの質と量の、まずは量を的確にするためのプロジェクトであり、これは今後も続くが、非常に良い取り組みであり、私も是非チームでやってみたいと思う。数で示すことで、監督やコーチはそのトレーニングを数値で可視化できる。予想とは全然少なければ、回数が出るように今後改善して行けば良いし、自分達が行っているトレーニングが感覚だけでなく、数値で表せれば、それらがまたトレーニング構築の判断材料になるため、一度知るということは非常に良いことであろう。

このSkills labは相手もいないし、外的要因も少なく、実施のピッチの状況とは違う事はコーチみんなが理解している。それでも、ここで獲得できるプラスの部分をしっかり活かして使用しているし、Skills labのコーチも試合の課題をしっかり認識すると共に、ここのトレーニングと実際のトレーニングを近づけるための取り組みを行ったりと、それぞれの分野が自分達の仕事だけで終わるのではなく、全体をより良くするために仕事に取り組んでいた。まさに「未来」の部分も常に考えて仕事をしていた。多くのスタッフが連携しながら選手にアプローチしているのが本当に良く見えた。まだ、GKのメニューというものはあまりないが、U17のGKのテクニック改善のために行ったトレーニングでは、U19とU17のGKコーチが一緒に来て、コーチングをしながら、Skills labの特性を利用してトレーニングしていたのも非常に印象的だった。

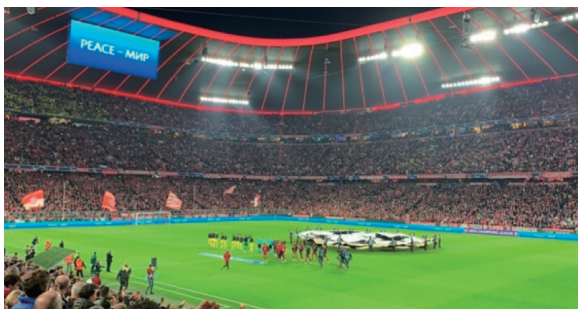
## (6) ドイツのサッカー文化

最後に一年間ドイツにいて感じたサッカー文化について報告したいと思います。多くの方がドイツに滞在し、ドイツのサッカー文化に付いて発信していると思います。私自身も研修前には、ドイツのリーグを見に行ったり、クラブを訪問した経験もありますし、多少はわかっていました。この文化をとにかく身を持って感じたかったというのが非常に大きくありました。2017年フットボールカンファレンスに元スペイン代表監督で2010年のワールドカップで優勝したデル・ボスケ氏を招いた時に、講演の中で「サッカーは社会や文化の中でしか成長しない」と言っていた。この言葉がとても印象に残っていて、その言葉を確かめたかった。実際にドイツに住んで多くの事を感じた。街のバスや電車では常にサッカーの結果や移籍情報がコロナのニュースの次に多く流れ、いつでも情報が入ってくる。街中にはサッカーチームのステッカーがライバ

ルチームと張り合いをしていたり、子供の運動会になれば、半分近い子供の服がFC Bayern Münchenのユニホームであったり、本当に多くの人の側にサッカーがあった。First Teamの試合には、毎節75,000人の観客が集まり、サッカーと共に生きているような人達で盛り上がっている。試合観戦には本当に多くの車椅子の方や障害者の方も来ていた。試合後の選手を多くの車椅子の方が出待ちしていたり、誰もがサッカーを楽しめる、熱中できる社会がそこにはあった。

2022-23シーズンのシュツットガルトの試合を見に行った時は、衝撃と共に身震いを感じた。キックオフ90分前くらいにスタジアム近くの駅に着いたが、電車は割と空いていて、みんなゆっくり来ているのかなと思っていたら、駅を降りてスタジアムへ続く道に出ようとしたら、何百メートルとスタジアムに続く道がサポーターで埋められて、先に進めなかった。そこでみんなでチャントを歌い、応援してからスタジアムに入って行った。それを見た時に、デル・ボスケ監督が言っていた言葉が本当に理解できた。この文化、社会があるからサッカーが強くなる。世界一を目指すって、こういうところに勝たないといけない。日本はこんな文化を作れるのだろうか、何十年後、同じようなサッカー文化が浸透し、日本社会にサッカーがどれだけ入り込む事ができるだろうかと考えさせられた。日本でも多くの方が本当に人生をかけてサッカーを文化にするために尽力されている。こんなものを見せつけられたら、我々日本はこれと競っても難しい。日本にも素晴らしい文化があり、サッカーと共に生きる熱心な方がたくさんいる。日本独自のサッカー文化を作り上げ、社会と共にサッカーが成長していく日が来ることを祈り、私自身も全力で取り組んでいかなければならないなと強く思った。

そして、サッカーをする側、指導する側にも大きな違いを感じた。海外やドイツの指導者は、とにかく選手の良い所を見ている。課題はもちろんあるが、選手の話をする時は、こんなストロングがあると強調する。私もどうしても課題に目がいきがちであり、それは日本全体にも言えると思う。しかし、その良さを、ストロングをしっかり見つけて、もっともっと伸ばしてあげる働きかけが多く必要だなと感じた。そして、サッカーを行う上で一番の「楽しむ」というところにも目を向けたい。監督が練習前や試合に選手を送り出す時に、良くViel Spaßと声をかけて送り出す。「楽しんで」という意味の言葉で、やはりサッカーをプレーするには、根本には楽しむ事が大事であり、多くの意味合いが集約されるかもしれないが、この環境でサッカーをやれること、サッカーそのものをやれること、またはこのプレッシャーを楽しむという事もあるか



FC Bayern Münchenのスタジアム



シュツットガルトの試合前のサポーター

もしれない。このViel Spaßという声かけも強く印象に残ったし、そういった精神も取り入れて行きたいと感じた。

## VI. 研修成果の活用計画（研修を終えて）

一年間の研修を終えて、FC Bayern Münchenというクラブを私なりに端的に表現すると、「組織が整理され、考え抜かれた素晴らしいストラクチャーがあり、良いものを効果的に活用し、多くのスタッフがしっかり連携をとり、選手を育成するという事に最大限アプローチしている」という言葉になるだろう。私と同じ役割を担う世話人のチーフアナリストのJohannesの仕事内容や仕事に対する姿勢は刺激を受けると共に、見習いたい事や、勉強になる事ばかりであり、多くの事を考えさせられる時間となった。Johannesも良く言っていたのは、文化も考え方も予算も全く違うため、ここにあるものをそのままコピーしても難しい。その国、組織をよく知っている私が学んだことを活かしてオリジナルを構築していくことが必要であると言っていたが、私も全くの同感である。今まで日本サッカーのトップを見てきたからこそ、今回学んだ事を加えて、新しいものを作り上げ、少しでも日本サッカーに、そしてこの分野の発展に貢献していく必要がある。

そういった中で、この研修の活用計画を大きく3つにして、簡単にまとめた。

1. 組織の整備、ストラクチャーの作成
2. サッカーの技術、戦術におけるスタンダードの共有
3. 選手へのアプローチ

まず、組織の整備、ストラクチャーの作成だが、組織を整理し、メンバーがしっかり連携して代表チームをサポートできる体制を整えたい。その中で仕事の効率化と無駄が無く全員が共通して使えるストラクチャーを作り、お互いでサポートし、人に仕事が紐づくのではなく、組織として課題を捉え、お互いをサポートしていけるように作り上げて行きたい。

次にサッカーにおいて、素晴らしいコーチや選手から多くのものを見て学んだ。自分のサッカーのスタンダードはこのFC Bayern Münchenであり、日本との違いや足りない部分も感じる事ができた。協会スタッフ、サッカー仲間に、この基準を大切にしながら、日本に合わせたような伝え方をしていきたい。ドイツがこうだから、ではなく、日本を知っているからこそ、強みや弱みをはっきりと共有して行きたい。日本サッカー協会は世界一を目指している。そのため、世界一であるFC Bayern Münchenのレベルを知り、ここを基準に考えて、多くの仲間に共有する事は大事であり、それをしっかりと努めて行きたい。

最後に、選手へのアプローチについてだが、研修後代表チームのスタッフとして、チーム帯同が再開する事になるだろう。実際に帰国して1週間後にはU16のアジア予選への帯同が決まっている。育成の日本代表選手のほとんどが、目標は海外でプレーすることであり、そこがどんな世界で、何が必要か、自分の経験や考えを持って選手をサポートして行きたい。

私が海外研修を希望した理由は、日本代表選手のほとんどが海外クラブ所属になり、我々スタッフも海外のクラブがどのようなものか、海外のクラブがどんな環境でトレーニングや試合をしているか、どんな分析方法、どんなテクノロジーを使い選手にアプローチしているかを知り、学びたかったからである。そして生活面、言葉も含め、海外で戦うという事を少しでも感じ体験したかったからである。



研修の取りまとめてくれた  
チーフアナリストのJohannes氏と

研修で得た知識、経験を伝え、共有する事が全てであり、自分自身で変えることのできる部分は全力で取り組み、日本代表の結果、日本人選手の成長、日本サッカーの成長、日本サッカー文化の醸成に微力ながらも貢献できるように努めて行きたい。そして、FC Bayern Münchenのように「今」と「未来」への仕事を同時に進めていけるように、多くのサッカー仲間と協力して取り組んで行きたいと思う。

## VII. その他

まずはこのような素晴らしい海外研修の機会を与えてくださり、新型コロナウイルスのパンデミックで研修が行えるか、渡航できるのかわからない中でも、多大なるご協力をして頂いた公益財団法人日本オリンピック委員会、そして、研修受け入れ先の決定から、私自身の仕事がたくさんある中、海外研修をしたいという私の強い意志を受け入れ承諾して送り出して頂いた公益財団法人日本サッカー協会には、この場をお借りして御礼申し上げます。また1年間という研修期間であったにも関わらず快く受け入れ、研修からドイツでの生活からあらゆる事に対してサポートして頂いたFC Bayern Münchenの同僚、関係者全ての方に御礼申し上げます。私自身、クラブに在籍した経験がなく、初めてのクラブが世界一のクラブであるFC Bayern Münchenであったことは幸せであり、真のプロフェッショナルの方々と仕事ができたことを誇りに思います。常に私のことを気遣ってくれ、日本について、日本サッカーについて興味を持ってくれ、多くの事を話し合った日々は忘れることができず、ここで出会った仲間が一番の財産になったかもしれません。また、現地での生活では多くの日本人の方々にもサポートして頂き、本当に充実した生活を送ることができ、感謝しています。出発前の不安、今までと違う環境、言葉でのストレスなど、たくさんあったはずですが、今振り返ると充実した日々と楽しかった研修生活しか思い出せません。多くの方と良い関係が築け、いつでも帰って来いよと多くの同僚に言って頂いて、ドイツに帰るところができた、というのが本当に嬉しい事でした。研修は終わりましたが、これからもお互いに情報交換しながら、常に最新の情報を得られるよう、努めて行きたいと思います。



## 資 料

1. スポーツ指導者海外研修事業実施要項
2. スポーツ指導者海外研修事業 研修員一覧
3. スポーツ指導者海外研修事業 研修員名簿

# スポーツ指導者海外研修事業実施要項

## 1. 趣旨

本会加盟団体に所属している新進気鋭の若手指導者をスポーツ指導者海外研修員（以下「海外研修員」という）として海外に派遣し、その専門とする競技水準の向上に関する具体的な方法等について研修させるとともに、海外の選手強化対策、指導者養成の実態等について調査・研究に当たらせ、将来我が国のスポーツ界を担う指導者を育成する。

## 2. 海外研修員の種類と研修期間

- (1) 海外研修員は長期派遣者（研修期間2年以内）と短期派遣者（同1年以内）とする。
- (2) 海外研修員は、原則として1ヶ所において集中的に研修するものとする。

## 3. 海外研修員としての条件

海外研修員は、次の条件を全て満たしている者でなければならない。

- (1) 研修先の受け入れの保証があること。
- (2) 勤務先等の所属長より本研修の承諾を受けていること。
- (3) 外国での研修に堪えうる語学力を有すること。
- (4) 当該年度の8月末日までには渡航先に出発できる見込みがあること。
- (5) 原則、帰国後、本会の強化スタッフまたは競技団体における指導者として活動できること。

## 4. 海外研修員の募集人数

募集人数については、若干名。

## 5. 海外研修員候補者の選考

- (1) 本会は本会ならびに本会加盟団体を対象に、海外研修員にふさわしい者（以下「候補者」という）を募集する。
- (2) 前項により当該団体（本会含む）が候補者を推薦する場合には、別に細則で定める海外研修員候補者推薦書を本会に提出するものとする。
- (3) 本会は、ひとりでも多くの「指導者」を、ひとつでも多くの団体（研修員派遣中の団体も含む）から派遣するよう選考する。同一団体から複数名の推薦を行う場合は、団体内で優先順位を付ける。

## 6. 海外研修員の決定

- (1) 本会は前項の推薦書に基づき書類選考ならびに面接の上、海外研修員を正式決定するものとする。
- (2) 海外研修員は、別に細則で定める誓約書及び研修計画書を本会に提出しなければならない。
- (3) 出発まで各自語学研修を行う。

## 7. 海外研修員に支給する経費

海外研修員に対する経費は、別に細則で定める要領で支払うものとする。

## 8. 海外研修状況の報告

海外研修員は3ヶ月毎に別に細則で定める研修状況報告書を本会に提出しなければならない。

## 9. 海外研修の中止

本会は海外研修員が本要項に違反したり、不適当な行為があったときは、その研修をとりやめ、帰国を命じることができるものとする。当該者は、その指示に従うものとする。

## 10. 海外研修報告書の提出

海外研修員は、帰国日より1ヶ月以内に別に細則で定める研修報告書を提出しなければならない。

## 11. その他

- (1) 海外研修員は帰国後、本会の開催する諸事業において研修報告を行う。
- (2) その他、海外研修員の派遣に関し必要な事項については別に細則で定めるものとする。

*平成12年4月1日	一部改訂
*平成14年4月1日	一部改訂
*平成16年4月1日	一部改訂
*平成18年11月1日	一部改訂
*平成22年12月22日	一部改訂
*平成27年1月20日	一部改訂
*平成28年4月1日	一部改訂
*平成30年4月1日	一部改訂
*令和2年3月31日	一部改訂（令和2年4月1日より適用）

## スポーツ指導者海外研修事業 派遣者一覧

競技／年度	昭和54	昭和55	昭和56	昭和57	昭和58	昭和59	昭和60	昭和61	昭和62	昭和63	平成元	平成2	平成3
陸上	澤木啓祐	宮川千秋	鬼塚純一	村木征人	室伏重信		永井 純		宮下 憲		吉田雅美		
水泳	*田口信教	松井 守	宮原利幸 二木広幸				元好三和子			高橋繁浩 高橋繁浩 坂本 弘	中森智佳子	*田中 京	
サッカー	森 考慈		松本育夫			田村 脩		山口芳忠					田嶋幸三
スキー	*笠谷幸生 *富井澄博					古川年正					*八木弘和		北島光則
テニス		本村 行									田村伸也		
ボート													
ホッケー													
ボクシング*									荻原千春				
バレーボール			古沢久雄		荒木田裕子	荒木田裕子							
体操		監物永三		北川淳一					*具志堅幸司		加納弥生	秋山エリカ	
バスケットボール	西尾末広	田中徹雄											
スケート					入沢孝一								
アイスホッケー													
レスリング*	*市口政光			藤本英男		富山英明				高田裕司	宮原厚次		
セーリング*		松山和興											
ウエイトリフティング*	福田 弘		*山下 修			*細谷治朗					三宅義信		
バドミントン	早川清孝		檜塚正一										
自転車													
卓球										須賀健二			前原正浩
相撲													
馬術									石黒健吉				
フェンシング*			*藤沢義彦										
柔道	中村良三		重岡孝文		柏崎克彦			山下泰裕			細川伸二		松岡義之
バドミントン				関根義雄							蘭 和真		
ライフル射撃	栗田俊昭		*香西俊輔					市村 忠					
剣道	巽 申直	志沢邦夫											
近代五種			富安一朗										
ラグビー				水谷 真									
カヌー		本田宗洋					福里修誠						
空手道			真野高一									西村誠司	佐久本嗣男
なぎなた	田中ミヤ子												
ボブスレー・リュージュ			市橋善行								鈴木省三		
野球													
武術太極拳													桑原典子
トライアスロン													
デコンドー													
パ・イスロン													
合計	13	8	13	5	4	5	3	3	4	3	10	3	8

※合計数は延人数

\*印は長期(2年)派遣者

平成4	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16	平成17
		青戸慎司		内田孝男		*土江寛裕				吉田孝久	近野義人		今村文男
		緒方茂生	緒方茂生		鈴木大地					岩崎恭子	林 享		*立花美哉
	野地照樹										木村孝洋		
			*佐藤 晃				菅野範弘		斗澤由香子	斗澤由香子			
				西野真一		米沢 徹				*植田 実			
			杉藤洋志	杉藤洋志									
						本 博国							
*田中幹保					佐藤浩明							山田晃豊	
			梶谷信之		瀬尾京子	瀬尾京子	三浦華子	*畠田好章		菅原リサ	*松永里絵子	橋口美穂	原田睦巳
								青柳 徹	青柳 徹	和田貴志	和田貴志		
	清野 勝										坂井寿如		
		*佐藤 満			赤石光生					嘉戸 洋			
							松本真也						
田口 隆			東根明人		松井幸嗣		玉村健次		*田中 茂			*山田永子	
			大門 宏										
								渡辺理貴			河野正和		
	齋藤一雄												
	*後藤浩二郎												
山口 香	中西英敏			田辺陽子	岡田弘隆	持田達人	増地千代里	金野 潤	長井淳子	中村行成	檜崎教子	中村兼三	阿武教子
	金坂広幸						*藤井 彌		三野卓哉				
			勝田 隆				山本 巧						
	成田寛志												
		栗山浩司											
筒井大助								小島啓民					
					二宮秀夫				神庭裕里				
									佐藤吉朗				
4	7	4	7	4	7	5	7	5	7	8	8	4	4

競技／年度	平成18	平成19	平成20	平成21	平成22	平成23	平成24	平成25	平成26	平成27	平成28	平成29	平成30
陸上			山崎一彦		高岡寿成	柳澤 哲	杉林孝法	今井美希	谷川聡	岩水嘉孝			
水泳		*稲田法子				原田早穂		中村真衣	*塩田義法	*三木二郎			
サッカー			猿澤慎治			今泉守正	廣山 望	田村奈津枝	山尾光則 坂尾美穂	広瀬統一		小川秀樹	*須藤啓太
スキー	*工藤昌巳	佐々木耕司								安食真治		久保貴寛	*河野恭介
テニス	谷澤英彦								土橋登志久	*岩渕聡			近藤大生
ボート				中村さなえ				*大戸淳之介		*白井祐介			
ホッケー													
ボクシング*													
バレーボール	松本洋			*中垣内祐一 小林 敦				*菅野幸一郎		荻野正二	大久保茂和		山村宏太
体操			*村田由香里	上村美揮			原 千華	黒田真由	*鹿島丈博 大島杏子	*遠藤由華 *森起人		桑原俊	古城梨早
バスケットボール													
スケート			白幡圭史	神野由佳					*出島茂幸				*小原英志
アイスホッケー													
レスリング*							*笹本 陸			*米満達弘			
セーリング*				中村健一		橋元郷							
ウエイトリフティング*													
バドミントン								*高橋豊樹		*舎利弗学			
自転車				沖 美穂				*福島晋一 *小田島梨絵					
卓球					三原孝博		*梅村 礼						
相撲													
馬術													
フェンシング*	岡崎直人						*和田武真		長良将司				
柔道			*井上康生			*塚田真希	*谷本歩実					金丸雄介	
バドミントン													
ライフル射撃													
剣道													
近代五種													
ラグビー													
カヌー				上原茉莉		*栗本宣和							
空手道													
なぎなた													
ボクシング・リージュ													
野球													
武術太極拳													
トライアスロン													
デコンター													中川貴哉
パ・イスロン					小舘 操					進藤隆			
合計	4	2	5	8	3	6	7	9	9	12	1	4	7

令和1	令和2	令和3	令和4	令和5	計
*松岡佑起					23
					22
松原英輝	*見汐翔太	片桐央視			20
			金城芳樹		16
					10
					6
				*藤本一平	2
					3
*塚田圭裕			*青木晋平		16
					25
					3
					10
*山中武司					4
		*湯元進一			12
					5
					5
		*嘉数陽介		*富田恭介	13
					5
					7
					2
					3
*松岡慧					6
			*海老沼匡	*大野将平	25
					3
					7
					3
					2
					4
					5
					5
					2
					4
					3
					4
*福井英郎			*忽那静香		4
					2
					3
6	1	3	4	3	257

# スポーツ指導者海外研修事業 研修員名簿

発行日現在

	氏 名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研 修 内 容
1	田口 信教	54年長期	水泳(競泳)	昭和54年10月24日 ～昭和56年10月31日	アメリカ インディアナ州 ブルーミントン	インディアナ大学 ジェームズ・E・カンシルマン	競泳の指導技術の理論と実践
2	市口 政光	54年長期	レスリング (グレコローマン)	昭和54年9月20日 ～昭和56年9月18日	アメリカ ウィスコンシン	ウィスコンシン大学 ウィリアム・P・モーガン	レスリング競技の運動構造と 技術分析に関する比較研究
3	笠谷 幸生	54年長期	スキー(ジャンプ)	昭和54年11月29日 ～昭和56年12月3日	オーストリア インスブルック	オーストリア国家検定 ジャンプコース 養成コース	ジャンプ競技におけるコーチング トレーニング法の修得
4	富井 澄博	54年長期	スキー(アルペン)	昭和54年9月5日 ～昭和56年5月15日	オーストリア インスブルック	オーストリア国家検定 アルペンコーチ 養成コース	滑降競技における運動機能技術 分析に関する比較研究
5	森 孝慈	54年短期	サッカー	昭和54年11月21日 ～昭和55年11月20日	ドイツ ケルン	西ドイツ プンデス フットボールリーグ IFCケルン	ナショナルコーチにふさわしい 知識の習得、指導実践の現地研修
6	沢木 啓祐	54年短期	陸上競技(中・長距離)	昭和54年9月16日 ～昭和55年7月7日	アメリカ オレゴン州	オレゴン大学 オレゴントラッククラブ	米国における中・長距離 コーチング法の修得
7	早川 清孝	54年短期	ハンドボール	昭和54年10月11日 ～昭和55年9月25日	ドイツ ケルン	ケルン ドイツ体育大学 (D・S・H・S)	西ドイツハンドボール組織のあり方 選手育成・ナショナルチームの指導体制
8	西尾 末広	54年短期	バスケットボール	昭和54年9月18日 ～昭和55年9月15日	アメリカ レキシントン	ケンタッキー大学 ジョー・B・ホール	バスケットボールについての コーチング論の研修
9	福田 弘	54年短期	ウエイトリフティング	昭和54年11月5日 ～昭和55年10月30日	アメリカ ロサンゼルス	ロサンゼルス マーベリッククラブ他	ウエイトリフティングの理論 育成コーチ・システム
10	栗田 俊昭	54年短期	ライフル射撃	昭和54年12月5日 ～昭和55年11月24日	ドイツ ヴィスバーデン	西ドイツ ヴィスバーデン射撃学校	射撃技術の修得・コーチ学 トレーナー課程の研修
11	中村 良三	54年短期	柔道	昭和54年10月6日 ～昭和55年10月30日	フランス パリ	フランス柔道連盟	外人選手の特性への対応策 コーチング学の研修
12	巽 申直	54年短期	剣道	昭和54年10月18日 ～昭和55年9月10日	イギリス ロンドン	ネンリキ道場 英国剣道連盟	英国人の剣道観に関する実態調査
13	田中 ミヤコ	54年短期	なぎなた	昭和54年10月18日 ～昭和55年10月18日	アメリカ ロサンゼルス	アメリカ なぎなた連盟他	アメリカにおける武道(スポーツ)の 動向等調査
14	監物 永三	55年短期	体操	昭和55年10月30日 ～昭和56年10月24日	アメリカ カリフォルニア	カリフォルニア大学 ロサンゼルス校	体操競技のコーチング 体操競技国際公認用語の習得
15	松井 守	55年短期	水泳(水球)	昭和55年10月17日 ～昭和56年10月16日	ハンガリー ブタペスト	ハンガリー ブタペスト B. V. S. Cクラブ	水球の技術研修
16	松山 和興	55年短期	ヨット	昭和55年11月15日 ～昭和56年11月12日	イギリスワイト島	英国ナショナル・ セイリングセンター 王立ヨット協会	ヨット・コーチ学の研修・選手強化 施設、方法の調査
17	本田 宗洋	55年短期	カヌー	昭和55年11月11日 ～昭和56年12月10日	ドイツ デュイスブルグ	西ドイツスポーツシュレー 西ドイツカヌー協会	カヌーの漕法および指導法
18	田中 徹雄	55年短期	バスケットボール	昭和55年10月15日 ～昭和56年10月15日	アメリカ ケンタッキー	ケンタッキー大学 ジョー・B・ホール	バスケットボールコーチ指導法 ウエイト・トレーニング他
19	宮川 千秋	55年短期	陸上競技(短距離)	昭和55年11月8日 ～昭和56年9月20日	アメリカ カリフォルニア	カリフォルニア大学 ヘイワード	陸上競技における指導法 (特に短距離走について)
20	本村 行	55年短期	テニス	昭和55年11月5日 ～昭和56年11月4日	アメリカ カリフォルニア	カリフォルニア大学 ロサンゼルス他	テニス指導法(特にジュニアの指導法)
21	志澤 邦夫	55年短期	剣道	昭和55年12月26日 ～昭和56年12月27日	オーストラリア シドニー他	オーストラリア剣道連盟	オーストラリアの剣道実態調査 コーチ法の研修
22	香西 俊輔	56年長期	ライフル射撃	昭和56年11月15日 ～昭和58年11月15日	アメリカ テキサス	ラニー・パシヤム射撃学校	射撃技術の研修 メンタル・マネージメント・プログラムの研修
23	藤澤 義彦	56年長期	フェンシング	昭和56年8月2日 ～昭和58年8月1日	フランス パリ	国立スポーツ研究所 (I. N. S. E. P)	フェンシング基礎技術、競技規則 審判技術指導法等の研修
24	山下 脩	56年長期	ウエイトリフティング	昭和57年1月29日 ～昭和59年1月28日	ドイツ ミュンヘン	ナショナルスポーツセンター バイエルン州ウエイトリフティング連 盟	ウエイトリフティング理論、育成システム クラブ組織、コーチングシステム
25	古沢 久雄	56年短期	バレーボール	昭和56年12月15日 ～昭和57年10月13日	ブルガリア ソフィア	ソフィア体育大学 ブルガリアバレーボール連盟	バレーボール指導法の体系とスポーツ 社会学理論およびゲーム分析
26	鬼塚 純一	56年短期	陸上競技 (混成競技)	昭和56年9月10日 ～昭和57年9月11日	アメリカ カリフォルニア州	カリフォルニア州立大学 ロングビーチ校	混成競技における技術水準および競技水準向上に關する 具体的方法論の研修
27	宮原 利幸	56年短期	水泳(水球)	昭和56年10月25日 ～昭和57年10月31日	アメリカ カリフォルニア州	アメリカ水球 ナショナルチーム	水球競技におけるコーチ学の研修と技術の研修
28	二木 廣幸	56年短期	水泳(飛込)	昭和56年10月13日 ～昭和57年10月2日	アメリカ カリフォルニア州	ミッションビエホ・スイム・クラブ マイアミ大学	飛込技術の修得およびエーजी・グループの指導法の研修
29	松本 育夫	56年短期	サッカー	昭和56年10月9日 ～昭和57年10月8日	ドイツ ケルン	西ドイツサッカー協会 I. F. C. ケルン	西ドイツにおけるジュニア選手の育成とその方法
30	櫻塚 正一	56年短期	ハンドボール	昭和56年10月13日 ～昭和57年9月9日	ドイツ ケルン	ケルン・ドイツ体育大学 (D・S・H・S)	ナショナルプレーヤーの指導内容と指導体系、クラブチー ムシステム等研修
31	富安 一郎	56年短期	近代五種	昭和56年9月1日 ～昭和57年8月31日	アメリカ テキサス州	サンアントニオ近代五種トレーニ ング・センター	選手強化策の現状把握、ジュニア底辺の普及対策 指導者養成の実態調査
32	真野 高一	56年短期	空手道	昭和56年11月25日 ～昭和57年11月25日	アメリカ ニューヨーク州	コロンビア大学体育学部 全米空手道連盟	競技力向上に関する研究(体力・技術) 空手におけるパ ワー、体力向上のための理論と実践
33	市橋 善行	56年短期	ボブスレー	昭和56年11月10日 ～昭和57年11月10日	スイス サンモリツ他	スイスボブスレー連盟 イタリア・コルチナ ボブスレー製造メーカー	ボブスレー競技、技術向上のための実技研修 ボブス レー機の修理調整研修

	氏 名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研 修 内 容
34	重岡 孝文	56年短期	柔道	昭和56年12月3日 ～昭和57年12月2日	ドイツ ケルン	西ドイツ柔道連盟 ドイツ体育大学 (D. S. H. S)	ヨーロッパ各国の指導体制、トレーニング方法の研究、選手強化対策・ヨーロッパ選手権大会の研修と分析
35	村木 征人	57年短期	陸上競技(跳躍)	昭和57年10月21日 ～昭和58年10月14日	アメリカ サンティエゴ	カルフォルニア州 サンティエゴ大学	跳躍競技の技術研修
36	北川 淳一	57年短期	体操	昭和57年9月1日 ～昭和58年9月2日	カナダ トロント	ヨーク大学 カナダ体操協会	体操競技の技術水準向上のための指導法研修
37	藤本 英男	57年短期	レスリング (グレコローマン)	昭和57年10月14日 ～昭和58年10月15日	ハンガリー ブタペスト	ハンガリー レスリング協会	グレコローマンスタイルの高等技術の修得技術分析と実践での応用トレーニング法の研究
38	関根 義雄	57年短期	バトミントン	昭和57年12月1日 ～昭和58年11月29日	イギリス ロンドン	ウインブルドン スカッシュ&バトミントンクラブ	世界トッププレイヤーの強化方法およびジュニア対策についての調査研究
39	水谷 眞	57年短期	ラグビー	昭和57年9月2日 ～昭和58年10月29日	イギリス ロンドン	イングランド ラグビー協会	戦法、技術論、およびコーチ学
40	入澤 孝一	58年短期	スケート(スピード)	昭和59年2月20日 ～昭和60年3月19日	ノルウェー オスロ	ノルウェースケート連盟 オスロ大学	ヨーロッパスピードスケートの強化体制およびコーチングの研修
41	柿崎 克彦	58年短期	柔道	昭和58年5月1日 ～昭和59年4月7日	イギリス ロンドン	BUDOKWAI イギリス柔道連盟	イギリスを中心としたヨーロッパ柔道技術およびトレーニング研究
42	室伏 重信	58年短期	陸上競技(投てき)	昭和58年10月16日 ～昭和59年10月4日	アメリカ ロサンゼルス	カリフォルニア大学 ロサンゼルス	アメリカ投てき選手を中心としたトレーニングおよび技術研究
43	荒木田 裕子	58年短期 59年短期	バレーボール	昭和58年10月12日 ～昭和60年10月30日	スイス ドイツ	スイスバレーボール連盟 西ドイツバレーボール連盟	ヨーロッパ諸国のバレーボール戦術 技術研修と情報収集
44	細谷 治朗	59年長期	ウエイトリフティング	昭和60年1月15日 ～昭和62年1月10日	ハンガリー ブタペスト	タタニアスポーツクラブ ハンガリーナショナルチーム	ウエイトリフティング理論、クラブ組織論、育成システム、コーチシステム
45	富山 英明	59年短期	レスリング (フリースタイル)	昭和59年12月16日 ～昭和60年12月15日	アメリカ アイオワ州	アイオワ州立大学	レスリング競技のコーチ学
46	田村 脩	59年短期	サッカー	昭和59年9月19日 ～昭和60年9月24日	ハンガリー ブタペスト	ハンガリー大学他	サッカーの指導方法および実践
47	古川 年正	59年短期	スキー(アルペン)	昭和59年10月25日 ～昭和60年10月21日	アメリカ バーモント	アメリカ・スキー ナショナルチーム	アルペン競技における運動構造と技術分析
48	本間 三和子	60年短期	水泳 (シンクロナイズドスイミング)	昭和60年8月15日 ～昭和61年8月23日	カナダ カルガリー	アクア・ベル スイミングスクール カルガリー大学	シンクロナイズドスイミングのコーチ法
49	永井 純	60年短期	陸上競技(中距離)	昭和60年11月16日 ～昭和61年11月15日	オーストラリア メルボルン	メルボルン大学	陸上競技のコーチング法
50	福里 修誠	60年短期	カヌー	昭和60年10月8日 ～昭和61年10月3日	ドイツ デュセルドルフ	西ドイツカヌー協会	カヌーの指導法と双方漕法
51	山下 泰裕	61年短期	柔道	昭和61年8月25日 ～昭和62年8月26日	イギリス ロンドン	イギリス柔道連盟	英国及びヨーロッパ各国の柔道強化対策と指導法
52	山口 芳忠	61年短期	サッカー	昭和61年10月24日 ～昭和62年10月30日	ドイツ ミュンヘン	西ドイツサッカー協会 F. C. バイエルン ミュンヘン	西独プロサッカーにおける指導方法及びゲームの戦い方
53	市村 忠	61年短期	ライフル射撃	昭和61年11月9日 ～昭和62年11月8日	ドイツ グイスバーデン	西ドイツ射撃協会 国立射撃学校	ライフル射撃における力学及び心理学的要素についての個人間の差異の解析に関する研究
54	具志堅 孝司	62年長期	体操	昭和62年9月17日 ～平成元年9月4日	ドイツ チュービンゲン	チュービンゲン大学	体操競技の指導方法
55	萩原 千春	62年短期	ボクシング	昭和62年10月1日 ～昭和63年10月5日	アメリカ クラマズフォール	オレゴン工科大学	アメリカにおけるボクシングのトレーニング法
56	宮下 憲	62年短期	陸上競技(障害)	昭和62年8月26日 ～昭和63年8月29日	ドイツ ケルン	ケルン・ドイツ体育大学	ハードル種目に関する技術・トレーニング方法論の研究
57	石黒 建吉	62年短期	馬術	昭和62年11月12日 ～昭和63年11月12日	イギリス ウィストン	アッシュグローブファーム トレーニングセンター	人馬の育成・審判員、翻訳、乗馬育成に関する研修・調査
58	高橋 繁浩	63年短期 元年短期	水泳(競泳)	昭和63年10月14日 ～平成2年9月16日	アメリカ コロラドスプリングス	コロラドスプリングス スポーツ科学研究所	運動生理学を中心に水泳の科学的トレーニング及びコーチングについて
59	須賀 健二	63年短期	卓球	昭和63年10月13日 ～平成元年10月8日	イギリス ヘスティング	国際卓球連盟	卓球コーチ学研修及び国際卓球連盟について
60	高田 祐司	63年短期	レスリング (フリースタイル)	昭和63年11月5日 ～平成元年10月26日	アメリカ ペンシルバニア	ペンシルバニア大学	レスリングのトレーニング方法、指導法及び科学性について
61	八木 弘和	元年長期	スキー	平成元年11月11日 ～平成3年9月18日	オーストリア ザールフェルデン	オーストリア スキー連盟	ジャンプ一流国の強化システムとトレーニング方式の研修
62	吉田 雅美	元年短期	陸上競技(やり投)	平成元年9月15日 ～平成2年9月14日	アメリカ シアトル	ワシントン大学	投てき競技者に必要な基礎的トレーニング法、栄養学、素材発掘の要点等の研修
63	坂本 弘	元年短期	水泳(競泳)	平成元年10月25日 ～平成2年10月24日	アメリカ コーバリス	オレゴン州立大学	競技者の指導テクニック及び泳法テクニック
64	田村 伸也	元年短期	テニス	平成元年10月3日 ～平成2年10月2日	アメリカ フロリダ	Harry Homman Tennis Camp	テニスコーチ学の全般についての研修
65	宮原 厚次	元年短期	レスリング	平成元年11月1日 ～平成2年10月31日	ドイツ フランクフルト	西ドイツ レスリング協会	グレコローマンスタイル技術研修及びコーチ学研修
66	三宅 義信	元年短期	ウエイトリフティング	平成元年11月6日 ～平成2年11月2日	アメリカ サンフランシスコ	アメリカ ウエイトリフティング協会	ウエイトリフティングのコーチ学、スポーツクラブ組織におけるシステムと指導方法、軍隊における選手指導とそのシステム

	氏 名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研 修 内 容
67	細川 伸二	元年短期	柔道	平成元年11月4日 ～平成2年11月3日	フランス バリ	フランス柔道連盟	フランスを中心としたヨーロッパにおける科学的トレーニングの理論を含む選手強化の対策の現状と比較検討及び社会体育としての普及発展状況とその指導方法について
68	蘭 和真	元年短期	バトミントン	平成元年10月10日 ～平成2年10月9日	イギリス ロンドン	英国バトミントン協会	イギリスを中心としたヨーロッパ各国の選手強化策、特にオリンピック対策(体制、組織、方法)の調査
69	鈴木 省三	元年短期	ボブスレー	平成元年12月10日 ～平成2年12月9日	カナダ カルガリー	カルガリー大学	医・科学的サポートの現状、選手育成システム、トレーニング計画と年間計画
70	加納 弥生	2年短期	体操	平成2年9月26日 ～平成3年9月19日	アメリカ	ユタ大学	体操競技の指導方法(コレオグラフィ)と選手育成システム
71	西村 誠司	2年短期	空手道	平成2年11月1日 ～平成3年10月31日	アメリカ シアトル	アメリカ空手道連盟	アメリカ大陸の空手道近代技術の研究
72	水野 智佳子	2年短期	水泳(競泳)	平成2年10月27日 ～平成3年10月26日	アメリカ コロラドスプリングス	USOCスポーツ科学研究所	競技者の泳法及び指導法
73	田中 京	3年長期	水泳 (シンクロナイズドスイミング)	平成3年9月12日 ～平成5年9月11日	アメリカ	Walnut Creek Aquanuts Synchronized Swimming Club	ウォールナットクリークでの実践トレーニング方法及びコーチング研修他
74	秋山 エリカ	3年短期	体操(新体操)	平成3年10月5日 ～平成4年8月15日	ロシア	Ретной Вокзал (Динамо) Москва	新体操の指導方法とソビエトにおける選手育成システムの研修
75	田嶋 幸三	3年短期	サッカー	平成3年10月7日 ～平成4年9月27日	ドイツ イタリア	サンブトリア ジェノバ他	サッカー選手の一貫指導、特に10～18歳迄のトップ選手の指導システムの研修
76	松岡 義之	3年短期	柔道	平成3年11月8日 ～平成4年11月7日	アメリカ	アメリカ柔道連盟(VSJF)他	アメリカにおける科学的トレーニング理論・方法を含む選手強化対策の現状と比較検討。社会体育としての柔道の普及発展状況とその指導方法について研修
77	前原 正浩	3年短期	卓球	平成3年9月16日 ～平成4年9月15日	イギリス	国際卓球連盟	イギリスを中心としたヨーロッパ各国卓球協会の指導体制、強化体制、トレーニング方法の研修
78	勝部 典子	3年短期	武術太極拳	平成3年11月27日 ～平成4年11月26日	中国 北京	北京体育学院	武術競技「南拳」の競技技術及びコーチングメソッドを北京市、中国武術研究会にて研修
79	佐久本 嗣男	3年短期	空手道	平成3年11月3日 ～平成4年11月2日	ドイツ	ドイツ トレーナーアカデミー他	ヨーロッパにおける空手道近代トレーニングの実態を視察調査、研究するとともにその指導法の研修
80	北島 光則	3年短期	スキー(コンバインド)	平成3年6月20日 ～平成4年6月19日	ノルウェー	ノルウェー スキー連盟他	ノルデックコンバインド競技指導技術の研究とコーチングをノルウェーナショナルチームにおいて研修
81	田中 幹保	4年長期	バレーボール	平成4年9月20日 ～平成6年8月15日	アメリカ イタリア	アメリカ ナショナルチーム イタリアプロリーグ他	世界最強イタリアチームの技術、戦術の研究と修得 イタリアリーグの運営システムの研究、アメリカのスポーツ医科学から見た選手強化策
82	田口 陸	4年短期	ハンドボール	平成4年11月16日 ～平成5年11月15日	ドイツ	ケルン体育大学他	ヨーロッパでのトレーニング指導方法、理論の研修及び新戦術の研究
83	山口 香	4年短期	柔道	平成5年2月15日 ～平成6年2月14日	イギリス	ハイウイカム柔道センター	イギリス柔道の強化の実態他
84	筒井 大助	4年短期	野球	平成4年8月31日 ～平成5年8月30日	アメリカ	ジョージア南大他	アメリカ式ベースボールの考察
85	野地 照樹	5年短期	サッカー	平成5年12月8日 ～平成6年12月7日	イギリス	イプスウィッチ フットボールクラブ	イングランドサッカーのコーチング イングランドサッカーの指導者養成
86	斎藤 一雄	5年短期	相撲	平成5年10月3日 ～平成6年10月2日	オーストラリア	オーストラリア相撲連盟	オーストラリアのタレント発掘方法とジュニアからトップまでの選手育成システム、および体力強化の実情等についての研修
87	中西 英敏	5年短期	柔道	平成5年12月21日 ～平成6年12月20日	イギリス	エジンバラクラブ	英国および欧州を中心に欧州柔道の技術と指導法の研究および指導体制、強化体制ならびにトレーニング方法の研修(強化現状把握・指導体系・練習体系・強化システム)
88	金坂 広幸	5年短期	ライフル射撃	平成5年10月31日 ～平成6年10月30日	ドイツ	U. Sオリンピック シューティングセンター	エア・ライフル、スモール・ライフル射撃の指導技術およびメンタルトレーニング
89	成田 寛志	5年短期	空手道	平成5年10月23日 ～平成6年10月22日	アメリカ	ジョージタウン大学	選手強化法を含むスポーツ医学全般の研修 空手道における動作の分析 脊椎のスポーツ傷害の診断と治療の研修
90	清野 勝	5年短期	アイスホッケー	平成5年8月26日 ～平成6年8月25日	カナダ	カルガリー・フレイムス(NHL)他	カナダナショナルチームのスタッフとして、アイスホッケーのコーチ学、心理学、技術の習得
91	後藤 浩二郎	5年長期	馬術	平成5年11月18日 ～平成7年11月17日	フランス ル・マン	ル・マン乗馬クラブ他	総合馬術競技に係わる選手の育成と競技馬匹の調教
92	青戸 慎司	6年短期	陸上競技	平成6年11月7日 ～平成7年11月6日	アメリカ コロラド	コロラド大学 ボルダーク校	陸上競技、主として短距離走のトレーニングについて研修し実践的にトレーニングを積み競技力向上のための指導法を研究する
93	栗山 浩司	6年短期	リュージュ	平成6年10月16日 ～平成7年10月15日	ドイツ	ドイツ ボブスレー・リュージュ連盟 (DBSV)	リュージュ競技の科学的なトレーニングシステムの現状、ジュニア選手の発掘および選手育成プログラムについて
94	緒方 茂生	6年短期 7年短期	水泳	平成6年11月14日 ～平成8年11月22日	アメリカ ミシガン州他	ミシガン大学 アメリカ水泳連盟他	アメリカの水泳とコーチングの実習
95	佐藤 満	6年長期	レスリング	平成6年11月17日 ～平成8年11月16日	アメリカ ペンシルバニア	ペンシルバニア州立大学	アメリカレスリング協会のシステムの研究トレーニング指導法及び処方の研究 レスリング技術の研究
96	梶谷 信之	7年短期	体操	平成7年9月1日 ～平成8年8月29日	アメリカ サンフランシスコ	スタンフォード大学	体操競技の指導方法について 選手育成システムについて
97	東根 明人	7年短期	ハンドボール	平成7年8月30日 ～平成8年8月29日	ドイツ ライプチヒ	ライプチヒ大学	ハンドボール競技におけるトレーニングコーチ方法全般について
98	大門 宏	7年短期	自転車	平成8年2月2日 ～平成9年2月1日	イタリア	スポーツグループエキップ93	ロードレースの新しい技術、高度な指導技術の研究開発 諸外国の競技力の分析・戦術・戦法について
99	勝田 陸	7年短期	ラグビー	平成7年9月25日 ～平成8年9月24日	イギリス	イングランド・ラグビー フットボール・ユニオン	最新ラグビーとコーチングの理論と実際について ラグビー先進国の強化システムと内容について

	氏 名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研 修 内 容
100	佐藤 晃	7年長期	スキー (スペシャルジャンプ)	平成7年10月25日 ～平成9年10月25日	フィンランド	クオピオ市 プイヨスキークラブ	フィンランドジャンプトレーニング内容指導法(ジュニア含む)
101	内田 孝男	8年短期	陸上競技	平成8年9月30日 ～平成9年9月25日	オーストラリア	オーストラリア 国立スポーツ研究所(AIS) キャンベラ	各種測定、トレーニングの研修 コーチングの実施研修
102	西野 真一	8年短期	テニス	平成8年10月31日 ～平成9年10月30日	アメリカ	ウィローツリーテニスクラブ他	アメリカのジュニア育成システムの環境医療とデータの重要性 アメリカのテニス界について
103	杉藤 洋志	7年短期 8年短期	ボート	平成7年9月1日 ～平成9年8月31日	カナダ 他	カナダ国立コーチング研修所	コーチングの実践研修
104	田辺 陽子	8年短期	柔道	平成8年11月24日 ～平成9年11月25日	イギリス スコットランド	クサック柔道クラブ	イギリスの柔道強化策及び環境について
105	佐藤 浩明	9年短期	バレーボール	平成9年10月1日 ～平成10年9月28日	オーストラリア キャンベラ市	The Australian Institute of Sport(AIS)	オーストラリア・スポーツ研究所の心理的支援体制の調査
106	赤石 光生	9年短期	レスリング	平成9年10月23日 ～平成10年10月30日	アメリカ アリゾナ州テンピー市	ARIZONA STATE UNIVERSITY	アメリカ合衆国が、世界へ向けたコーチングの実習
107	松井 幸嗣	9年短期	ハンドボール	平成9年10月23日 ～平成10年10月22日	ドイツ ケルン	ドイツスポーツ大学ケルン	ドイツにおけるチーム強化の為の練習法・指導法と強化対策の実態及び指導者の育成
108	岡田 弘隆	9年短期	柔道	平成9年10月6日 ～平成10年9月30日	イギリス ロンドン	武道会	ヨーロッパ柔道のトレーニング方法及びコーチングについて
109	二宮 秀夫	9年短期	武術太極拳	平成9年9月26日 ～平成10年9月25日	中国 北京	北京体育大学	長拳三種目・武術全般のトレーニング法
110	鈴木 大地	9年長期	水泳	平成10年2月4日 ～平成12年2月3日	アメリカ マサチューセッツ州	ハーバード大学 アメリカ水泳連盟 他	アメリカにおける競泳のコーチングの実習
111	米沢 徹	10年短期	テニス	平成10年10月31日 ～平成11年10月30日	フランス アキテーヌ州 アルカッション市	アルカッションテニスクラブ	フランスの指導法と練習内容の把握、フランスシステムの把握、世界レベルのテニス研究、ヨーロッパテニスの研究
112	瀬尾 京子	9年短期 10年短期	体操	平成9年10月5日 ～平成11年10月4日	アメリカ オクラホマ州 オクラホマ市	Dynamo Gymnastics Club	アメリカでの体操競技における指導方法
113	本 博国	10年短期	ボクシング	平成10年9月8日 ～平成11年9月6日	ウズベキスタン タシケント市	"DINAMO"STADIUM PUSHKIN SQUARE 他	科学的トレーニング、指導法、栄養管理
114	持田 達人	10年短期	柔道	平成10年11月10日 ～平成11年10月31日	フランス パリ	INSEP(国立スポーツ体育研究所)	フランスの国立スポーツ、体育研究所の指導体系
115	土江 寛裕	10年長期	陸上競技	平成11年1月15日 ～平成13年1月13日	オーストラリア シドニー・キャンベラ	NSW Institute of Sport、 Australian Institute of Sport(AIS)	オリンピック地元開催に向けた強化体制と、競技力向上のためのトレーニング方法の習得
116	藤井 彌	11年長期	ライフル射撃	平成11年10月29日 ～平成13年10月27日	フランス パリ	フランス射撃協会	ジュニア期からの一貫指導システムの研究
117	菅野 範弘	11年短期	スキー(ジャンプ)	平成11年10月3日 ～平成12年10月2日	スロベニア ブレッド市 他	SLOVENIA SMUCARSKI KLUB TRIGLAV KRANJ	スロベニアにおけるスキージャンプの強化システム、トレーニング指導方法、転載におけるコンディショニング
118	三浦 華子	11年短期	体操	平成11年8月10日 ～平成12年8月8日	アメリカ ボイシー市	Bronco Elite Gymnastics Club Boise State University(BSU)	アメリカ体操競技におけるジュニア、大学生の指導方法
119	松本 真也	11年短期	セーリング	平成11年12月20日 ～平成12年12月18日	アメリカ アナポリス	United States Naval Academy	セーリング先進国のアメリカ合衆国におけるコーチング研修及び実態調査
120	玉村 健次	11年短期	ハンドボール	平成11年10月12日 ～平成12年10月10日	スウェーデン イエーテボリ市	IK Savehof Tus Shutterwald	北欧のハンドボール技術におけるチーム強化のための練習法・指導法、コーチング全般
121	増地 千代里	11年短期	柔道	平成11年9月11日 ～平成12年9月12日	イギリス ロンドン	武道会、ハイウィカム柔道センター キャンベラー柔道クラブ	イギリスを中心としたヨーロッパ柔道のトレーニング方法及びコーチングについて
122	山本 巧	11年短期	ラグビー	平成11年6月14日 ～平成12年6月10日	イギリス ケンブリッジ	Cambridge University Rugby Union Football Club 他	ラグビー先進国の強化体制及びコーチングに関する研修
123	畠田 好章	12年長期	体操	平成12年10月28日 ～平成14年10月27日	アメリカ カリフォルニア	スタンフォード大学	アメリカにおけるトップ選手への指導法及び練習環境や強化育成方法の研究
124	青柳 徹	12年短期 13年短期	スケート(スピード)	平成12年8月27日 ～平成14年9月12日	オランダ ブローニンゲン市	オランダスケート連盟	スピードスケート王国・オランダにおけるコーチングスキルの習得及び選手強化体制の見極め
125	渡辺 理貴	12年短期	卓球	平成12年9月14日 ～平成13年9月9日	イギリス ノッティンガム	イギリス卓球協会 他	ヨーロッパのクラブシステムとコーチング
126	金野 潤	12年短期	柔道	平成12年9月10日 ～平成13年9月9日	アメリカ コロラドスプリングス	アメリカ柔道連盟	USOCでの格闘技グループのコーチング方法アメリカ柔道連盟の強化システム
127	小島 啓民	12年短期	野球	平成12年10月13日 ～平成13年10月10日	アメリカ キューバ	スタンフォード大学 サンタクララ大学 他	アメリカ大学野球トップのスタンフォード大学チーム、キューバのナショナルチームのコーチング
128	田中 茂	13年長期	ハンドボール	平成13年8月18日 ～平成15年8月7日	スペイン バルセロナ	カタルーニャハンドボール協会	スペインのハンドボール技術及び練習法、指導法の習得
129	長井 淳子	13年短期	柔道	平成13年9月24日 ～平成14年9月23日	イギリス バッキンガムシャー	National Judo Academy, Cambely Judo Club, High Wycombe Judo Centre	イギリスを中心としたヨーロッパ柔道の現状と選手強化の体制、指導法について
130	三野 卓哉	13年短期	ライフル射撃	平成13年9月17日 ～平成14年8月11日	ドイツ ヰイスバーデン	ドイツ射撃協会 ブルガリア射撃協会	仕事と競技を両立することができるシステムの調査、ならびにこのシステムによる選手への指導方法
131	神庭 裕里	13年短期	武術太極拳	平成13年10月19日 ～平成14年10月18日	中国 北京	北京体育大学	長拳3種及び武術全般のコーチ研修
132	佐藤 吉朗	13年短期	トライアスロン	平成14年1月19日 ～平成15年1月20日	オーストラリア キャンベラ	Australian Institute of Sport	ASIをトレーニング拠点として活動しているジュニアナショナルチームに帯同

	氏 名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研 修 内 容
133	斗澤 由香子	13年短期 14年短期	スキー	平成13年8月14日 ～平成14年8月28日 平成14年11月5日 ～平成15年12月27日	カナダ ヴィクトリア	National Coaching Institute(B.C)	フリースタイルスキーに関するコーチングの実戦研修
134	植田 実	14年長期	テニス	平成14年12月9日 ～平成17年1月23日	スペイン バルセロナ	サンチェス&カサル テニスアカデミー	コーチングの実践研修
135	吉田 孝久	14年短期	陸上競技	平成14年7月27日 ～平成15年7月26日	イギリス レスターシャー	ラフバラ大学UK陸連ハイパフォー マンズセンター(HIPC)	跳躍種目コーチング技能の修得
136	岩崎 恭子	14年短期	水泳	平成14年10月4日 ～平成15年9月30日	アメリカ ロサンゼルス	ミッションビエホ・ナダドーズ・スイミ ングクラブ	ジュニアコーチングの実戦研修
137	菅原 リサ	14年短期	体操	平成14年8月31日 ～平成15年8月31日	オーストラリア キャンベラ	Australian Institute of Sport	コーチングの実践研修
138	和田 貴志	14年短期 15年短期	スケート(スピード)	平成14年7月25日 ～平成15年7月24日 平成15年9月1日 ～平成16年8月31日	アメリカ ソルトレークシティ	ユタ・オリンピックオーバル	コーチング及び強化システム研修
139	嘉戸 洋	14年短期	レスリング	平成14年8月16日 ～平成15年7月21日	ウクライナ キエフ	ウクライナ国立スポーツ専門大学	コーチングの実践研修
140	中村 行成	14年短期	柔道	平成14年8月18日 ～平成15年8月17日	イギリス エジンバラ	イギリス柔道連盟及びEdinburgh Club	ヨーロッパ柔道のトレーニング方法及び コーチングについて
141	松永 里絵子	15年長期	体操(新体操)	平成15年10月5日 ～平成17年10月4日	カナダ バンクーバー	War Memorial Gymnasium	選手強化育成システム及びコーチングの 実戦研修
142	林 享	15年短期	水泳	平成15年10月16日 ～平成16年10月15日	アメリカ パークレー	カリフォルニア大学パークレー校	コーチング及びトレーニング理論の研修
143	檜崎 教子	15年短期	柔道	平成15年9月19日 ～平成16年9月18日	アメリカ オマハ	Offutt Air force Base Judo Team	コーチング及びトレーニング方法の研修
144	近野 義人	15年短期	陸上競技	平成16年1月19日 ～平成17年1月18日	アメリカ デーヴィス	カリフォルニア大学デーヴィス校	中距離トレーニング及びコーチング研修、 バイオメカニクス研究
145	河野 正和	15年短期	卓球	平成15年9月23日 ～平成16年9月22日	イギリス ノッティングハム	英国ナショナルトレーニングセン ター、イギリス卓球協会	英国及び欧州各国の卓球コーチング システム、クラブ運営システムの研修
146	木村 孝洋	15年短期	サッカー	平成15年8月1日 ～平成16年7月31日	イギリス ロンドン	アーセナル	若手有望選手の指導・育成方法の研修
147	坂井 寿如	15年短期	アイスホッケー	平成15年8月6日 ～平成16年8月5日	カナダ エドモントン	Concordia大学	コーチングの実戦研修
148	山田 永子	16年長期	ハンドボール	平成16年8月1日 ～平成18年7月12日	ノルウェー オスロ	Bekkelagets Sport Club	ハンドボールの指導法、強化システムの研修
149	中村 兼三	16年短期	柔道	平成16年10月12日 ～平成17年11月23日	イギリス ロンドン	Budokwai柔道クラブ	コーチング、ナショナルチームとの交流
150	橋口 美穂	16年短期	体操	平成16年11月28日 ～平成17年11月30日	オーストラリア ブリスベン	Moreton Bay College	ジュニア選手の育成、ナショナル強化選手の指導方法、 環境施設運営面等の研修(Moreton Bay Collegeで研修)
151	山田 晃豊	16年短期	バレーボール	平成16年9月29日 ～平成19年9月2日	イタリア ラベンナ	イタリア女子バレーボール・ナショ ナルユースチーム(CLUB ITALIA)	世界トップレベルのセリエAを中心に ヨーロッパトップリーグの視察と コーチング、チームプレーの研修
152	立花 美哉	17年長期	水泳 (シンクロナイズドスイミング)	平成17年10月13日 ～平成19年11月12日	アメリカ サンタクララ	Santa Clara Aquamaid Synchronized Swim Club	語学研修を主とし、シンクロの歴史の深いアメリカで指導を 中心にスポーツマネジメントを学ぶ
153	今村 文男	17年短期	陸上競技	平成17年9月9日 ～平成18年9月1日	イタリア サルツツォ	Scuola di Marcia e degli sport in Saluzzo	競歩選手におけるトレーニング方法及びコーチングに関する 研修
154	原田 睦巳	17年短期	体操	平成17年9月13日 ～平成18年9月11日	アメリカ バロアルト	Men's Gymnastics Arrillage Family Center	選手強化に関する指導方法の研修および、大学組織の 競技運営方法の比較の調査
155	阿武 教子	17年短期	柔道	平成17年8月25日 ～平成18年8月24日	フランス パリ	INSEP(国立スポーツ体育研究所)	柔道競技人口が世界一のフランスにおいての指導方法や 他の欧州各国の柔道事情を学ぶ
156	工藤 昌巳	18年長期	スキー(アルペン)	平成18年5月26日 ～平成20年5月24日	オーストリア インスブル ック	オーストリアスキーチーム帯同	アルペンスキーコーチングについて学び、オーストリア国 家検定アルペンスキーコーチ資格取得を目指す
157	谷澤 英彦	18年短期	テニス	平成18年11月30日 ～平成19年11月29日	オーストラリア ゴールドゴースト	バットキャッシュインターナショナル テニスアカデミー	ジュニアからプロ選手までの指導方法
158	松本 洋	18年短期	バレーボール	平成18年11月30日 ～平成18年12月27日	ブラジル リオデジャネイロ	Centro de desenvolvimento de Voleibol	ブラジルバレーボールの強化システムとスキル、プロフェ ッショナルリーグの現状について
159	岡崎 直人	18年短期	フェンシング	平成18年11月20日 ～平成19年11月19日	フランス パリ	INSEP(国立スポーツ体育研究所)	トレーニング方法全般の修得およびマネージメント
160	稲田 法子	19年長期	水泳	平成19年12月16日 ～平成21年12月14日	アメリカ アリゾナ フェニックス	Brophy College Preparatory	アシスタントとしてトレーニング方法を学ぶ
161	佐々木 耕司	19年短期	スキー(スノーボード)	平成19年8月26日 ～平成20年8月24日	カナダ カルガリー	National Coaching Institute Calgary	コーチング技術、トレーニング方法を習得し施設を視察。カナダの コーチングシステムやその構築背景を研究
162	村田 由香里	20年長期	体操(新体操)	平成20年12月19日 ～平成22年12月18日	ロシア イルクーツク	ディナモスポーツクラブ	ロシア新体操の選手育成システム及び指導方法について 学ぶ
163	井上 康生	20年長期	柔道	平成21年1月11日 ～平成23年1月10日	イギリス エジンバラ	イギリス柔道連盟	英語研修及びイギリスを拠点として、ヨーロッパにおける柔 道指導法及びヨーロッパ各国の柔道事情を学ぶ
164	山崎 一彦	20年短期	陸上競技	平成20年9月20日 ～平成21年9月19日	イギリス レスター	ラフバラ大学	イギリスのオリンピック強化システムと対策の調査および コーチングを学ぶ
165	猿澤 真治	20年短期	サッカー	平成20年8月13日 ～平成21年8月5日	フランス クレーズフォンテーヌ	フランスナショナルフットボールクラ ブ	フランスナショナルフットボール学院にて、U-13～15年代 の育成プログラム全般を学ぶ

	氏 名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研 修 内 容
166	白幡 圭史	20年短期	スケート(スピード)	平成20年6月1日 ～平成21年5月31日	オランダ フローニンゲン	ヘーレンフェーン室内リンク	スピードスケートコーチングテクニックおよび選手強化、選手育成システムを学ぶ
167	沖 美徳	21年長期	自転車	平成21年5月9日 ～平成23年3月31日	イタリア ベルガモ	Selle Italia-Ghezzi	自転車コーチング技術・語学研修及びイタリアサイクリングコーチングライセンスの習得
168	中垣内 祐一	21年長期	バレーボール	平成21年8月3日 ～平成23年5月2日	アメリカ アナハイム	アメリカバレーボールトレーニングセンター	世界トップレベルの指導法習得
169	中村 さなえ	21年短期	ボート	平成21年9月9日 ～平成22年9月8日	ドイツ ポツダム	Olympia Stutz Punkt Brandenburg	ナショナルチームのマネジメント、コーチング、選手育成システム、選手選考方法、コーチ育成プログラムを研修
170	小林 敦	21年短期	バレーボール	平成21年7月22日 ～平成22年7月20日	アメリカ アナハイム	アメリカバレーボールトレーニングセンター	各国シニア・ジュニア等トップチームの合宿にて指導者としての研修を行い、指導法、強化システムについて学ぶ
171	上村 美揮	21年短期	体操(体操競技)	平成22年2月27日 ～平成23年2月26日	アメリカ テキサス	Bela Karolyi Gymnastics Center	アメリカ体操界のジュニア育成システム及びその指導方法について学ぶ
172	神野 由佳	21年短期	スケート(ショートトラック)	平成21年4月27日 ～平成22年4月26日	カナダ カルガリー	Calgary Olympic Oval	ショートトラックにおける指導方法及び選手強化、選手育成システムについて
173	中村 健一	21年短期	セーリング	平成22年3月31日 ～平成23年3月30日	イギリス サザンブトン	Royal Yachting Association	ユース世代の育成・強化について学ぶ
174	上原 茉莉	21年短期	カヌー	平成21年10月11日 ～平成22年10月10日	ドイツ マグデブルク	ドイツカヌー連盟	日本カヌー界のレベルアップとロンドンオリンピックでメダルを獲得するための技術・トレーニング方法を研修する
175	高岡 寿成	22年短期	陸上競技	平成22年8月31日 ～平成23年8月30日	アメリカ マンモスレイク	マンモストラッククラブ	高地トレーニングなどの科学的なトレーニング及びアメリカの選手強化方法
176	三原 孝博	22年短期	卓球	平成22年8月30日 ～平成23年8月11日	中国 河北省	正定国家訓練基地	若年層からトップまでの育成方法
177	小館 操	22年短期	バイアスロン	平成22年6月21日 ～平成23年6月20日	オーストリア ザルツブルグ	オーストリアスキー連盟 オーストリアバイアスロン連盟	バイアスロン競技におけるスキー技術、射撃技術、指導法を習得し、バイアスロン連盟組織のあり方についても学ぶ。
178	塚田 真希	23年長期	柔道	平成23年9月7日 ～平成25年9月6日	イギリス ロンドン	エジンバラ柔道クラブ 武道会	英語研修、そして国外における柔道指導法および、諸外国の柔道事情を学ぶ。また諸外国コーチとのネットワークを構築する。
179	栗本 宣和	23年長期	カヌー	平成23年7月17日 ～平成25年7月16日	ハンガリー ブラハ	ハンガリーカヌー連盟	ハンガリーにおけるカヌー・カヤックスポーツの組織体制とコーチングシステム・強化プログラムのあり方について学ぶ。
180	柳澤 哲	23年短期	陸上競技	平成23年10月8日 ～平成24年10月7日	オーストラリア ブリスベン	Australian Institute of Sport (AIS)	各世代における体系化された練習方法の習得と組織としての運営方法
181	原田 早穂	23年短期	水泳 (シンクロナイズドスイミング)	平成23年5月15日 ～平成24年5月14日	マルタ共和国 スリーマ	Aquatic Sports Association of Malta	語学の鍛錬とともに、シンクロの中心であるヨーロッパにおいて指導力を磨く。
182	今泉 守正	23年短期	サッカー	平成23年7月13日 ～平成24年6月1日	アメリカ フロリダ	フロリダ州立大学(FSU)	US ODPプログラムの研修、IMGアカデミーでの育成プログラム研修等
183	橋元 郷	23年短期	セーリング	平成23年9月1日 ～平成24年8月31日	イギリス サザンブトン	国際セーリング連盟 英国セーリング連盟	英国における主にユース世代(U-19)の育成システム、およびセーリング組織の運営方法
184	佐本 睦	24年長期	レスリング	平成24年6月2日 ～平成26年6月1日	ドイツ ミュンヘン	Sportinternat Schifferstadt	ヨーロッパにおけるレスリングのコーチングスキルの習得と語学習得とプロクラブの運営システム等。
185	梅村 礼	24年長期	卓球	平成24年6月27日 ～平成26年6月26日	オーストリア ザルツブルグ	Werner Schlager Academy	欧州の強豪クラブにてヨーロッパの強化育成システムを学ぶ。
186	和田 武真	24年長期	フェンシング	平成24年7月25日 ～平成26年7月24日	ハンガリー ブタペスト	Budapest Honved(旧軍隊チーム)	元ナショナルチームの所属クラブにてビギナーからトップ選手に対し指導を行いながら指導技術、マネジメントを学ぶ。
187	谷本 歩実	24年長期	柔道	平成25年3月31日 ～平成27年3月30日	フランス パリ	INSEP(国立スポーツ体育研究所)	欧州の強豪国の1つであるフランスにおいて、柔道指導法、強化システムの調査、研究及び周辺諸国の柔道事情を学ぶ。
188	杉林 孝法	24年短期	陸上競技	平成24年9月15日 ～平成25年9月14日	スウェーデン ヨーテボリ	エルグリーテIS	世界トップレベルチーム及びコーチのもとでコーチングの研修を行うとともに語学研修を行う。
189	廣山 望	24年短期	サッカー	平成25年1月8日 ～平成26年1月7日	スペイン マドリッド	RCDエスパニョール	欧州のプロクラブにおけるトップ、育成、普及各レベルのコーチングを学ぶ。また、ヨーロッパの指導者ライセンスを取得する。
190	原 千華	24年短期	体操(新体操)	平成24年11月1日 ～平成25年10月31日	ベラルーシ ミンスク	National Center of Olympic Training in Rhythmic Gymnastics	ベラルーシのジュニア期の選手発掘・育成方法から、日本選手が国際試合で結果を残すための指導方法について学ぶ。
191	大戸 淳之介	25年長期	ボート	平成25年9月14日 ～平成27年9月13日	イギリス ロンドン	Staines Boat Club	チームマネジメント、コーチ育成プログラム他
192	菅野 幸一郎	25年長期	バレーボール	平成25年7月4日 ～平成27年4月27日	アメリカ	テキサス大学	バレーボール指導方法、世界レベルのチーム強化方法
193	高橋 豊樹	25年長期	ハンドボール	平成25年8月17日 ～平成27年8月16日	デンマーク スベンボー	オーレボイスコーレ ハンドボルトレーナリエ	ジュニア育成、コーチ育成システムおよびその指導方法、強化システムについて学ぶ
194	福島 晋一	25年長期	自転車(ロード)	平成25年11月18日 ～平成27年11月17日	フランス	SA Vendee Cyclisme	チームマネジメント、コーチング、フランス語、IF関係等
195	小田島 梨絵	25年長期	自転車(MTB)	平成25年8月2日 ～平成27年7月31日	スイス	Velo Club Tamaro	地域チーム運営、ジュニア選手のトレーニング方法、英語・イタリア語習得
196	中村 真衣	25年短期	水泳(競泳)	平成25年9月8日 ～平成27年9月7日	アメリカ ミッションビエホ	ナタドールズスイミングクラブ	普及、強化、指導者育成等全般
197	今井 美希	25年短期	陸上競技	平成25年7月1日 ～平成26年6月30日	スウェーデン ヴェクショー	IFKヴェクショー	跳躍(特に走り高跳)指導論・トレーニング論・トップアスリートの男性選手・女性選手の育成方法の違い、スウェーデン陸連関連
198	田村 奈津枝	25年短期	サッカー	平成25年6月13日 ～平成26年6月12日	ドイツ フライブルグ	フライブルグFC	トップチームの普及、強化、指導者養成等全般を学ぶ

	氏 名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研 修 内 容
199	黒田 真由	25年短期	体操(体操競技)	平成25年8月3日 ～平成26年8月26日	アメリカ テキサス	World Olympic Gymnastics Academy	ジュニア期の育成方法
200	塩田 義法	26年長期	水泳(水球)	平成26年11月18日 ～平成28年11月17日	アメリカ(ロサンゼルス)	USA Water Polo, Inc.	アメリカの代表チーム及び大学水球チームのコーチング、マネジメント方法、選手育成システム、コーチ育成プログラムを研修
201	鹿島 丈博	26年長期	体操(体操競技)	平成26年11月30日 ～平成28年11月29日	アメリカ(バロアルト)	スタンフォード大学	アメリカにおける体操競技の実態と強化について研修
202	出島 茂幸	26年長期	スケート(スピードスケート)	平成26年9月12日 ～平成28年9月11日	アメリカ(ソルトレークシティ)	ユタオリンピックオーバル	アメリカナショナルチームにてコーチング研修、育成システム、医科学サポートの活用方法、マネジメントについて学ぶ
203	谷川 聡	26年短期	陸上(ハードル)	平成26年7月30日 ～平成27年7月29日	アメリカ(フロリダ)	University of Central Florida ほか	アメリカにおけるトレーニング理論、トレーニングシステム、コーチング論を学ぶ
204	山尾 光則	26年短期	サッカー	平成26年9月10日 ～平成27年9月9日	ドイツ(ライムスバッハ)	IFC. Reimsbach	グラスルーツ・育成年代・トップチームのトレーニング研修、ゲーム分析、ゲーム環境等の調査等
205	坂尾 美徳	26年短期	サッカー	平成26年5月10日 ～平成27年5月9日	ドイツ(デュイスブルグ)	MSV デュイスブルグ	ドイツプロクラブの育成カテゴリーのプランニング・トレーニングの構築およびコーチング、プロクラブの普及・育成・強システムについて研修
206	土橋 登志久	26年短期	テニス	平成26年10月31日 ～平成27年10月30日	フランス(パリ)	フランステニス連盟 ほか	フランスのプロ・ジュニア選手の育成・強化システム、トレーニング方法、メンタルアプローチ、大会でのコーチング等ほか、国による強化・組織の運営システムを学ぶ
207	大島 杏子	26年短期	体操(体操競技)	平成26年10月12日 ～平成27年10月11日	アメリカ(サクラメント)	Elevate Gymnastics Academy	アメリカ体操界のジュニア選手育成システム及びその指導方法、跳馬の技術指導方法について学ぶ
208	長良 将司	26年短期	フェンシング(サーブル)	平成26年7月27日 ～平成27年7月26日	アメリカ(ポートランド)	Oregon Fencing Alliance	世界トップのナショナルチームの技術指導及びマネジメントを学ぶ
209	三木 二郎	27年長期	水泳(競泳)	平成28年3月14日 ～平成30年3月7日	イギリス(ロンドン)	イギリス水泳連盟	イギリス水泳連盟の運営システム・強化システム・指導プログラムを学びながら、ヨーロッパ諸外国コーチとのネットワークを構築する
210	岩渕 聡	27年長期	テニス	平成28年2月24日 ～平成30年2月23日	イギリス(ロンドン)	イギリステニス協会(LTA)	LTAがロンドンオリンピックにおける自国選手の金メダル獲得(男子シングルス)を成し遂げた強化策を学ぶ
211	白井 祐介	27年長期	ボート	平成27年8月27日 ～平成28年8月26日	デンマーク(コペンハーゲン)	コペンハーゲン大学	世界トップレベル選手のトレーニング方法、コーチングおよびサポートの実態や、医科学データの活用方法を学ぶ
212	遠藤 由華	27年長期	体操(新体操)	平成27年10月11日 ～平成29年10月10日	アメリカ(シカゴ)	North Shore Rhythmics	アメリカ在住のロシア人コーチのもとで技術・トレーニング方法、コーチング方法を研修し、またアメリカの段別・レベル別選手育成システムとその構築された背景を研究について学ぶ
213	森 勉人	27年長期	体操(体操競技)	平成27年7月10日 ～平成29年7月9日	イギリス(バジルトン)	South Essex Gymnastics Club	イギリスにおけるジュニア・シニアへの一貫教育システムおよびナショナルチームでの指導方法を学ぶ
214	米満 達弘	27年長期	レスリング(フリースタイル)	平成27年8月31日 ～平成29年8月30日	アメリカ(ペンシルバニア)	ペンシルバニア大学	世界に勝ち抜くためのフリースタイルの専門技術及び戦略・戦術を修得し、強豪国の強化対策等の研修並びに世界のトップクラス選手情報を収集・分析する
215	舍利弗 学	27年長期	ハンドボール	平成27年8月31日 ～平成29年8月30日	ドイツ(ベルリン)	Fusch Berlin	欧州のプログラムや男子ドイツ代表チーム各年代のコーチングやスカウティング方法を学び、また海外遠征、合宿時に活かせるネットワークの構築をはかる
216	岩水 嘉孝	27年短期	陸上競技	平成28年12月20日 ～平成29年12月19日	オーストラリア(メルボルン)	メルボルントラッククラブ	メルボルントラッククラブにおける中長距離とマラソンの実践的トレーニングと指導内容を学ぶ
217	広瀬 統一	27年短期	サッカー	平成27年9月6日 ～平成28年9月5日	アメリカ(サンノゼ)	San Jose State University	フィジカルトレーニングの実地研修およびアスレティックトレーニング指導論の研修を行う
218	安食 真治	27年短期	スキー(アルペン)	平成27年6月12日 ～平成28年6月11日	オーストリア(インスブルック)	オーストリアスキー連盟	オーストリアにおけるスキー競技のコーチングシステムと強化環境の調査及びコーチングスキルを学ぶ
219	荻野 正二	27年短期	バレーボール	平成27年8月29日 ～平成28年8月28日	ブラジル(サンパウロ、リオ・デ・ジャネイロ)	ブラジルバレーボール協会	指導法や世界トップチームの強化方法を学ぶ
220	進藤 陸	27年短期	バイアスロン	平成27年7月27日 ～平成28年7月26日	ノルウェー(リレハンメル)	ノルウェーバイアスロン連盟	バイアスロン射撃術、クロスカントリースキー技術、トレーニング法およびその指導要領を学ぶ
221	大久保 茂和	28年短期	バレーボール	平成28年9月15日 ～平成29年9月14日	アメリカ(カリフォルニア)	アメリカバレーボール協会	アメリカにおけるバレーボールの最新コーチング及びトレーニングプログラムを学ぶとともに、アンダーカテゴリーにおけるalent発掘・育成プログラムを観察する
222	小川 秀樹	29年短期	サッカー	平成29年6月19日 ～平成30年6月18日	ドイツ(インゴシュタット)	FC Ingolstadt04	ドイツ・ブンデスリーガのクラブにおけるチーム強化及び選手育成、地域におけるプロクラブのあり方を学ぶ
223	久保 貴寛	29年短期	スキー	平成29年5月14日 ～平成30年5月13日	フィンランド(ヴォッカッティ)	Vuokatin Urheilupuisto	フィンランドの強化拠点となっているヴォッカッティを中心に夏季及び冬季におけるジャンプトレーニング、クロスカントリートレーニング、その他トレーニング内容の把握
224	桑原 俊	29年短期	体操(体操競技)	平成29年8月29日 ～平成30年8月28日	アメリカ(スタンフォード)	Ford Burnham gymnastics gym	スタンフォード大学にて体操競技の指導、他国の指導・技術分析の方法を学び実際に指導を行う。
225	金丸 雄介	29年短期	柔道	平成29年4月5日 ～平成30年3月31日	イギリス(カーディフ)	Sports Wales National Centre	イギリスをはじめとするヨーロッパ諸国のトップクラス、及びナショナルチームにおける柔道指導法、強化システムの調査、研究および周辺諸国の柔道事情を学ぶ。
226	須藤 啓太	30年長期	サッカー	平成30年7月9日 ～令和2年6月9日	スペイン/バスク	ATHLETIC CLUB	世界トップレベルを走るスペインの育成年代の日常に触れ、スペイン人と日本人の技術、戦術、フィジカル、メンタル面における違いから日本人が海外でプレーする際にアドバンテージとなる部分を見極める。
227	河野 恭介	30年長期	スキー	平成30年7月10日 ～令和2年12月27日	オーストリア/インスブルック	Arlberg Ski club	アルペンスキーのコーチング理論、育成方法(日本との違い)を海外チームから学ぶ。
228	小原 英志	30年長期	スケート	平成30年8月10日 ～令和2年8月9日	カナダ/カルガリー	カナダスケート連盟 Canadian Sport Institute Calgary	カナダにおけるスピードスケートのコーチング技術の習得、カナダのスピードスケートナショナルチームにおけるサポート体制の調査、カナダにおけるコーチ養成システムの調査
229	近藤 大生	30年短期	テニス	平成30年11月1日 ～令和2年10月31日	フランス/パリ	フランステニス連盟	今年のデビスカップで優勝したフランスから、地域や県からトップ選手までの育成システムを学ぶ。
230	山村 宏太	30年短期	バレーボール	平成30年8月20日 ～令和2年8月19日	イタリア/ラツィオ	Fonteviva Livorno/ Paolo Montagnani	世界スタンダードのバレーボール習得と日本人に合わせたインバプション、そして日本人におけるブロックシステムの構築とコーチングスキルの向上について
231	古城 梨早	30年短期	体操(新体操)	平成30年8月22日 ～令和2年8月21日	カナダ/トロント	Jusco Rhythmic Gymnastic Club	カナダのチームで指導しているブルガリア人コーチのもとで、語学の研修と手具の技術やトレーニング等、各年代の指導プログラムを学ぶ。

	氏 名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研 修 内 容
232	中川 貴哉	30年短期	テコンドー	平成30年8月24日 ～令和2年8月23日	イギリス/マンチェスター	GB Taekwondo (GaryHall)	ナショナルテコンドーセンターにおける強化活動、運営についての研修、練習映像および試合映像の撮影方法および分析方法、活用方法についての研修。
233	松岡 佑起	31年長期	陸上競技	令和2年3月17日 ～令和3年1月22日 令和4年4月1日 ～令和5年3月31日	イギリス/ロンドン オランダ/ナイメーヘン イギリス/カーディフ	Saint Mary's University Global Sports Communication Cardiff Metropolitan University	中長距離種目のトレーニング方法、コーチング論、選手強化体制について学び、日本選手の強化育成に向けた新たなトレーニングプログラム、強化育成システムを構築する基礎とする。 ※令和2年3月 イギリス/ロンドンへ渡航後、新型コロナウイルス感染症の影響等により一時帰国。 ※令和4年4月 新型コロナウイルス感染症等により研修地をオランダ/ナイメーヘンへ変更 ※イギリスにおけるトップレベルのコーチング及びトレーニング方法を学ぶため、研修先をイギリス/カーディフへ変更。
234	塚田 圭裕	31年長期	バレーボール	令和元年8月7日 ～令和3年8月6日	アメリカ/ペンシルベニア	Temple University	世界レベルの選手・チームの強化方法並びにアメリカナショナルチームの視察・大学スポーツ(NCAA)の研究。
235	山中 武司	31年長期	アイスホッケー	令和元年6月26日 ～令和3年6月25日	カナダ/オタワ	KANATA Lasers	ジュニア世代の育成指導方法を学ぶ。アイスホッケーの新しい戦術の習得。
236	松岡 慧	31年長期	フェンシング	令和元年8月20日 ～令和3年8月19日	フランス/パリ	フランスフェンシング協会	フェンシング競技指導に必要な技術並びに技能習得。強豪国の育成並びに強化システムの調査・研究。
237	福井 英郎	31年長期	トライアスロン	令和元年6月28日 ～令和3年9月30日	フランス/オルレアン	フランストライアスロン連盟	2024年パリオリンピックに向けた若手育成・強化方法を学ぶ。種目転向型・専門型などの選手発掘方法を調査する。
238	松原 英輝	31年短期	サッカー	平成31年4月1日 ～令和2年3月13日	フランス/ランブイエ	Toulouse FC 育成センター	フランスにおけるプロクラブの主に10歳から12歳までの育成プログラムを学ぶ。
239	見汐 翔太	2年長期	サッカー	令和4年1月13日 ～令和6年1月20日	イギリス/バーミンガム	イングランドサッカー協会 (FA)	イングランドサッカー協会 (FA) の強化拠点から、そのフィロソフィーとデータ分析の活用を学ぶ。
240	湯元 進一	3年長期	レスリング	令和3年8月28日 ～令和5年8月27日	ロシア/ウラジカフカス	ロシアレスリング協会	ロシア国内の育成年代からトップ選手までのコーチング方法及びトレーニング方法を学ぶ。
241	嘉数 陽介	3年長期	ハンドボール	令和3年10月29日 ～令和5年10月28日	デンマーク/オーフス	Sports Academy in Aarhus	①競技力向上に関する具体的取り組みの調査・研究 ②コーチングの方法論に関する調査および実践
242	片桐 央規	3年短期	サッカー	令和3年9月19日 ～令和4年9月18日	ドイツ/ミュンヘン	バイエルン・ミュンヘン	選手へのコーチング方法を中心に、データの活用方法、育成や指導者への関わりなどを学ぶ。
243	青木 晋平	4年長期	バレーボール (ビーチバレーボール)	令和4年8月7日 ～令和6年8月6日	スロベニア/リュブリャナ	Ludus Beach Park Ljubljana	NFとクラブチームとの連携、という視点から、強化、育成、普及の関係性の研究など。
244	海老沼 匡	4年長期	柔道	令和4年4月14日 ～令和6年4月13日	イギリス/カーディフ キャンハリー	Welsh Judo Federation Camberley Judo club	語学の習得や様々な人脈構築を目的に研修を行なっていき、総合的スキルを向上させていく。
245	忽那 静香	4年長期	トライアスロン	令和5年1月10日 ～令和7年1月10日	アメリカ/コロラド州・ アリゾナ州テンピ	USA Triathlon	2028年の自国開催となるアメリカ (USATriathlon) の強化策を習得。2028年ロスオリンピックの競技環境の把握・情報収集も兼ねる。
246	金城 芳樹	4年短期	スキー	令和4年12月5日 ～令和5年12月4日	スロベニア/プラニツァ	Nordijsko društvo Rateče-Planica	スキージャンプの技術向上のためのコーチング、ジュニアからシニアまでの一貫性のある強化育成システムなど。
247	藤本 一平	5年長期	ホッケー	令和5年9月5日 ～令和7年9月4日	イギリス/ロンドン	Indian Gymkhana Hockey Club	・ジュニアからシニアまで一貫性のある強化育成システム構築のための情報収集及び地域のホッケークラブと学校のクラブ活動の連携システムの研究など。
248	富田 恭介	5年長期	ハンドボール	令和5年9月1日 ～令和7年8月31日	ドイツ/ライプツヒ	SC DHfK Leipzig	ドイツブンデスリーガ・プロクラブにおけるトップチームの練習法と指導法及び育成カテゴリーにおける育成プログラムとタレント発掘システムについて学ぶ。
249	大野 将平	5年長期	柔道	令和5年8月1日 ～令和7年7月31日	イギリス/スコットランド	JudoScotland South Platt Hill, Ratho Edinburgh EH28 8AA	拠点のスコットランドやイギリス国内のトップ柔道選手への柔道指導、地方クラブチームでの柔道指導を通してイギリスにおける指導法を学ぶ。

**スポーツ指導者海外研修事業  
令和4年度帰国者報告書**

発 行 日 令和7年3月31日

編集・発行 公益財団法人 日本オリンピック委員会  
〒160-0013

東京都新宿区霞ヶ丘町4番2号

Japan Sport Olympic Square13階

TEL03-6910-5957 FAX03-6910-5960



